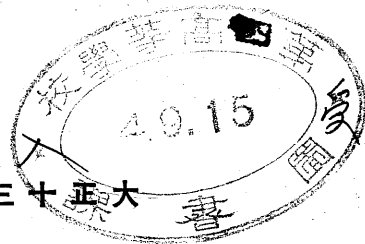


北辰會雜誌

第百壹號



大正三十三年十二月

北辰會

北辰會會務報告 (大正十三年度)

一、本年度の代議員及び各部委員左の如し。

代議員

文三 田村仙定 文二 上田小一郎 文一 井上清一
乙 本田功太郎 乙 瓜生順良 乙 青山三雄
丙 坂井功 丙 三森良二郎 丙 大竹太郎
理三 辻 理二 市川勇 甲 岩田幸作
乙 北川 豐 乙 上田朔夫 乙 服部信一
丙 吉橋 亘 丙 原秀晃 丙 武田良一
丁 今井猛雄 丁 久保保 丁 町原 寛

各部委員

副會長 河合義文

理事 上原菊之助 駒井德太郎

講演部 委員長 駒井德太郎

委員 文三 岩田彦治 文三 杉本直久 文三 近藤俊一
甲 南野衛二 乙 瓜生順良 理二 稻波爲孝

音樂部 委員長 木村謹治

委員 理三 山田泰藏 文三 谷 尙一 理二 杉江重康
文二 小田信之 丙 菅原案山子

雜誌部 委員長 篠原一慶

委員 理三 岡 良一 文三 先崎 勇 文三 藤島良平
甲 本林鋼治 乙 坂田精一

弓道部 委員長 鴻巢盛廣

委員 文三 門脇善一郎 文三 小坂民男 理三 平澤三郎
甲 石澤貞義

劍道部 委員長 上原菊之助

委員 理三 土川元夫 理三 今井猛雄 文三 野口正藏
理二 中野 勉

柔道部 委員長 長岡寛統

委員 文三 市川 瀏 理三 内藤雄二郎 文三 關屋信芳
理二 堀井新吉 文二 高野善一

野球部 委員長 伊藤武雄

委員 文三 石上光治 文三 川澄重雄 文三 先崎 勇
理三 岡本 港

庭球部 委員長 栗原廣道

委員 文三 日比野恒次 理三 松永傳左衛門 文二 森崎 隆
理二 伊庭一夫

旅行部 委員長 林 並木

委員

理三 小林 忠雄 理三 落合 貞雄 文三 豐岡 英次
理三 新村 千博 理三 廣根 德太郎 理二 上田 朔夫
理二 大橋 正一 理二 中島 信悟 理二 中村 正純
理一 下平 秀祐

漕艇部 委員長 長岡 寛統

文三 河内 虎夫 文二 三輪 勝治 文二 林 實
理三 時田 弘儀 理三 堂森 芳夫 理三 市川 勇

競技部 委員長 泉 瑛

文三 清水 輝次 文三 松原 信行 文三 原田 以和夫
理三 北川 豊 理三 藤澤 三郎 文二 吉田 忠勝
文二 服部 正夫 理二 福野 禎太郎

一、代議員會

十三年度總務委員互選の結果左の四名當選す。

文三 田村 仙定 文三 本田 功太郎

理三 田村 仙定 理三 今井 猛雄

一、新入生歡迎會

午前十時より至誠堂に於いて開催、田村總務開會の辭を述べ河合副會長上原理事の挨拶あり各部代表者の部紹介の後新入生總代の謝辭あつて今井總務閉會の辭を以て終る。

一、四月二十四日より五月六日迄總務委員にて各部豫算の査定をなし、役員會、及協議會を経て確定豫算となる。

一、五月二十二日 理事駒井教授に代りて、長岡教授新たに理事となる。

一、五月二十二日 釧道部委員長上原教授に代り山本教授同部委員長となる。

一、六月三日 春季水上運動會を開催す。

一、六月廿二日 代議員會を開き、選手推戴式舉行に關する打合せをなす。

一、六月十三日 選手推戴式

午後三時より運動場に於いて舉行。辻總務開會の辭を述べ本田總務により選手推戴を終り武藤會長長岡理事の激勵演説、田村應援團長初め生徒有志の激勵辭あつて各部選手代表者の挨拶の後田村總務閉會の辭を述べ武藤會長の發聲にて北辰會の萬歳三唱後散會す。推戴を受けたる選手は劍柔道、弓術、野球、庭球、漕艇、競技の諸部なり

一、六月十七日 協議會

對外選手派遣費豫算を決定す

一、九月九日 對外選手慰勞會

午後三時より無聲堂に於いて開催、田村總務開會の辭を述べ會長の挨拶あり長岡理事は柔、劍、弓道、辯論、漕艇各部の戦績を、泉競技部長は競技部の戦績を報告して、各部取締の報告に移り辻總務の閉會の辭にて午後五時半閉會。會長外左の特別會員多數の出

席ありたるは近來の盛會なりき。

河合副會長、上原、長岡兩理事、林、駒井、鴻巣、泉、伊藤、山本、栗原、各部委員長、浦井、市村、星野、石井、江上、瀬川各教授、楠、古賀、佐藤、各師範。

一、九月九日 優勝部祝勝會

午後七時より金谷館にて開く。(本年度優勝部は弓術、漕艇及び競技部デザートコースに入るや田村總務、武藤會長の挨拶各代表者の祝辭、優勝部代表者の謝辭の後各部委員の感想談に移り、優勝三部の萬歳を三唱し閉會したるは九時半參會者七十三名左の如し。

武藤會長 河合副會長、上原長岡兩理事、林、駒井、篠原、鴻巣、山本、栗原各部委員長、星野、石井、江上、瀬川各教授、古賀、楠、佐藤各師範、總務四名、選手四十五名、各部代表者五名有志二名。
一、九月十五日 音楽部長木村教授に代り大藏教授新たに同部委員長となる。

一、同 柔道部長長岡教授に代り石井教授新たに同部委員長となる。

一、九月二十九日 代議員及各部委員會

一、總務選舉方法左の如く確定す。

選舉期日 第二學期運動會後

被選舉者 二年在學生

選舉者 代議員及び各部委員一名宛

選舉方法

二學年各組より三名の候補者を各組に於て互選し、計二十一名の候補者中より文科生二名理科生二名を協議會に於いて連記投票を爲し、各科別々に最高点者より四名を取りて更に各科二名宛の決

選投票を行ひ次点者の各科二名を補缺と爲す。

一、應援團長選舉方法左の如く確定す。

選舉期日 九月初旬

被選舉者 二年在學生

選舉者 代議員各部委員一名宛及其年度の應援團リーダー二

十一名

選舉方法

總務員選舉に準ず。(但し始め最高点者より五名を選出し更に一名を決選投票す)

一、北辰會雜誌に關する件。

各部は毎學期雜誌部の指定する締切迄に必ず部報を投稿する事。部報の頁数は其の都度雜誌部委員及び總務員に於て適當に案分する事。

一、北辰會メダルに關する件。

北辰會のメダルを記念牌と各部賞牌に分つ。記念牌は北辰會に對する功勞者の意を以て各部に盡力せし者に與ふ。即ち總務及び、對外選手を有する部は選手及びマネシア、その他の部は各部のマネシア、應援團長及副團長にして凡て各部長の推薦に依

る。其他特に功勞ありと認むべき者は部長之を推薦する事を得。
此等の推薦されたるもの、適否を部長會議に於いて決定するもの
とす。

各部賞牌は各部の主催する大會等の優勝者に與ふる事從來と異る
ところなし。

寒稽古のメダルはこれを廢止す。

一、十一月三日の体育デーに關する件。

同日各部同時に大會を開催する事。

各部は大會の方法を總務にまで申し出づる事。

一、十一月二日 攝政宮殿下行啓奉祝のため提灯行列を舉行する事。

一、十月二十六日 秋季陸上運動會を開催す。

一、十月二十八日 代議員各部代表應援團リーダー會を開き、大正
十四年度の應援團長を選挙す。

第一候補者左の如し。

文二甲 和田 勉 辻村友吉 辻 幸七
文二乙 鈴木義正 高橋啓一 深川俊夫
文二丙 加藤清一 三森良二郎 小山市次
理二甲 關 亮之助 木下義忠 長谷川幸市
理二乙 松本喜義 伊藤 悟 齋藤和雄
理二丙 飯田茂次 小川 薫 原 秀晃
理二丁 小泉與貞 佐竹龍雄 竹澤秀一

第一回 投票の結果左の如し。

木下義忠 十七票 加藤清一 四票 關亮之助 四票

小川 薫 二票 辻 幸七 二票

第一回投票の結果最高票者木下義忠絕對多數に依り第二回投票を
省略確定。

一、十一月二日 攝政宮行啓奉祝提灯行列を午後七時より舉行す。

一、十一月二十五日 部長會議

大正十三年度の記念章贈呈者左の如く決定す。

總務 田村仙定 本田功太郎 辻 皓 今井猛夫

講演部 岩田彦治

雜誌部 岡 良一

柔道部 市川 瀧 内藤雄二郎 小林庄平 寶鏡 晃

山本與一 村橋恒造 紙谷治作 池内勇造

正木榮一 關谷信芳 小葉田 淳 吉橋 亘

劍道部 土川元夫 今井猛雄 洲崎七郎 本多 靜

春木靖男 近藤昇一 宮村修一郎 野口正藏

弓術部 小坂民男 門脇善一郎 平澤三郎 中谷久彌

野球部 先崎 勇 川澄重雄 石上光次 岡本 港

寺島 寛 寺西秀人

庭球部 松永傳左衛門 日比野恒次 小熊正虎 佐々木外喜雄

漕艇部 河内虎夫 時田弘儀 近藤正造 矢坂留治

藤松磐石

音樂部 山田泰藏

競技部 清水輝次 松原信行 原田以和夫 作井辰明

高野宗久 北川 豐 近藤虎雄 藤澤三郎

林 輝焜 洲崎健治

旅行部 新村千博 廣根徳太郎

應援團 田村仙定 鶴谷外喜雄 落合貞雄

但し田村仙定及今井猛夫の如き總務に應援團又劍道に
重なりおるものも一個を與ふ。

一、十二月二日 協議會を開き大正十四年度の總務を互選す。各組

候補者左の如し

文三甲 最上百三郎 藤本秀麿 和田 勉

文二乙 瓜生順良 岩田榮治 東郷豐治

文二丙 佐々木境圓 加藤清一 三森良二郎

理二甲 佐藤和三雄 宮子時雄 關 亮之助

理二乙 角家悟一 毎田周一 上田朔夫

理二丙 鈴木俊一 押田 傳 原 秀晃

理二丁 小川 薫 久保 保 和田二郎

第一回投票結果左の如し。

文科 最上 十六票 東郷 十四票 三森 十一票 瓜生 八票

岩田 二票 佐々木 一票 加藤 一票

理科 和田九票 上田 九票 關 七票 久保 六票 佐藤 三票

小川 三票 原 二票 角家 一票 鈴木 一票

瓜生は野球部マネジャーとして第二回決選投票の候補者を辭退せ
るため文科最上、東郷、三森、岩田、理科和田、上田、關、久保
の各科四名宛より第二回投票の結果左の如し。

文科 最上 十七票 東郷 十六票 三森 十六票 岩田 二票

理科 和田 十七票 上田 十六票 關 二票 久保 五票

文科東郷、三森同点なるを以て更に二名中より一名を投票し東郷
十四票、三森十三票にて東郷當選す。

依つて大正十四年度總務委員左の如く確定す。

文科 最上百三郎 東郷豐治

理科 和田次郎 上田朔夫

一、大正十四年一月五日 東大主催第二回全國高等學校辯論大會に
選手派遣の件可決す。

一、グラウンドの一角にスキー場創立及びスキー購入の件可決す。

(辻記)

講演部報

我が講演部は本年より新たに部員制を採用し内は毎週の練習會を

起して部員相互に相輔達し、外は八高辯論部との聯合演説會を催し、或は巡回講演を行ひ、以て久しく萎縮沈滞せる我部に對して勇躍の一轉期を興へたのである。冗筆を省き、此處に我部の爲せる事業の大体を報告しませう。

○練習會 別段に支障なき限り、毎週一回乃至二回、至誠堂に於て開く。時には中等學校の講堂等を借りて、一般に部員以外の聴衆は少いけれども、出演者は極めて熱心に練習します。思案の結果を發表することは、筆に於てとあれ口に於てとあれ、難しいものであるから、今こゝにその二三回を紹介しよう。

第一回練習會

- | | |
|-------------|----------|
| 一、精神的國境の撤廢 | 文二 瓜生 順良 |
| 一、來るべき社會と信仰 | 同 佐々木 境圓 |
| 一、青年に激す | 同 深川 俊夫 |
| 一、只 今 | 同 武藤 桂巖 |
| 一、墓の彼方に | 同 加藤 清一 |
| 一、日米問題 | 文三 杉本 直久 |
- 第五回練習會
- | | |
|-------------|-----------|
| 一、大アジヤ主義 | 文二 三森 良二郎 |
| 一、思想的懊惱の裡より | 文一 高峯 一愚 |
| 一、利己主義 | 理二 生 魚 進 |
| 一、光は何處 | 同 稻波 爲孝 |

- | | |
|------------|----------|
| 一、共存か共滅か | 文一 萩森 秀市 |
| 一、精神文明への反省 | 文三 岩田 彦治 |

第十三回練習會

- | | |
|-------------|-----------|
| 一、豈米國のみならんや | 文一 大河原 保彦 |
| 一、英國産業の發達より | 文三 藤本 良一 |
| 一、所 感 | 文二 南野 衛二 |
| 一、所 感 | 武藤 校長 |
- 六月八日(日曜) には午前、午後にはわたり北陸中等學校辯論大會を至誠堂に於て開く。

- | | |
|----------------|-----------|
| 午前の部 九時二十分より | |
| 一、開會の辭 | 部長 駒井 教授 |
| 一、燦たる太陽の生活に入らむ | 小松中 中村 亮治 |
| 一、憂ふべき我帝國の前途 | 石農 山根 與喜吉 |
| 一、對米策如何 | 二中 菊池 省三 |
| 一、大地に足かけて | 敦商 片山 宗四郎 |
| 一、力の國 | 高岡商 畠山 喜一 |
| 一、先覺の王子聖德太子 | 七中 泉 太一 |
| 一、精神的なれ | 上市農 鈴井 傳一 |
| 一、時局問題最後の解決 | 礪中 宮本 外次 |
- 今大會の新試みとして、知名の士を審判官として、各辯士の成績を審査することゝなつてゐた。故に審査中本校の瓜生君が

「國體擁護の叫び」の題の下に、立派な演説をした。審査の結果左の如し。

- | | |
|-------------|------------|
| 一等 | 高岡商業 畠山 喜一 |
| 二等 | 小松中學 中村 亮治 |
| 午後の部 | |
| 一、開會の辭 | 駒井 部長 |
| 一、血か涙か | 魚中 長田 清道 |
| 一、眞の自由 | 一中 川岸 友吉 |
| 一、社會生活標準の樹立 | 福商 小山 清藏 |
| 一、美其の他 | 金工 小林 外史夫 |
| 一、相互愛に生きよ | 高中 松下 嘉行 |
| 一、暗黒街に雷鳴を聞く | 金商 平名 義親 |
| 一、自由教育 | 富中 藤井 義淨 |
| 一、カントについて一言 | 石師 藤田 三郎 |

審査中、本校の岩田君が演説された。審査の結果左の如し。

- | | |
|----|------------|
| 一等 | 高岡中學 松下 嘉行 |
| 二等 | 魚津中學 長田 清道 |

終りに當日の審査員の方々に感謝の意を表すると共に、出演下された辯士諸君にも、厚く御禮申し上げます。

○七月十三日。午後七時より於至誠堂。八高四高聯合辯論大會を開催した。

當日の番組左の如し。

- | | |
|-------------|-----------|
| 一、開會の辭 | 本校 東郷 豐次 |
| 一、恒久の光を求めて | 本校 加藤 清一 |
| 一、大自然と人間愛 | 八高 小澤 久之丞 |
| 一、眞に生くるの道 | 本校 稻波 爲孝 |
| 一、一輪の白百合 | 八高 若林 秀善 |
| 一、連帶觀に生くる社會 | 本校 瓜生 順良 |
| 一、希望する權利 | 八高 安藤 安正 |
| 一、爾太陽の龍兒 | 本校 南野 衛二 |
| 一、埋れる者の爲に | 八高 渡邊 龍策 |
| 一、創造的努力主義 | 本校 岩田 彦治 |
| 一、曙光の点滅 | 八高 富田 一郎 |
| 一、閉會の辭 | 本校 深川 俊夫 |

此會は第一回の聯合辯論大會ではあつたが、聴衆も多く、辯士も緊張し、盛會裡に終つた事は兩校辯論部の爲、慶賀の至りまでも申しませう。來年は八高に於て開く心算である。

○七月十五日 京都帝國大學主催全國高等專門學校辯論大會には左の選手を派遣した。

「社會的不安を除くの道」

瓜生 順良

當日の参加校は約四十校、各十分餘。此時に於ける我選手の好評は實に噴々たるものであつて、大いに我が部の意氣を發揚したので

ある。

○夏季巡回講演記録

〔第一回〕 七月二十四日午後七時より、金石町小學校に於て。盛會裡に十時半閉會

一、自覺せよ

大河原保彦

一、民族的自覺の上に立つ亞細亞民族

三森良二郎

一、眞晝間の幽霊

加藤清一

一、政黨改革の第一歩

瓜生順良

一、道德思想より見たる野蠻及び野蠻人

南野衛二

一、偶感一則

駒井教授

〔第二回〕 同二十五日午後七時より、高岡市平米小學校に於て。盛會裡に十時半閉會。

一、開會の辭

高峯一愚

一、恐ろしきツナの前に立ちて

大河原保彦

一、藝術鑑賞に就て

金井久雄

一、民族的自決より見たるアジヤ

三森良二郎

一、魂の叫びに立たん

加藤清一

一、道德思想より見たる野蠻及野蠻人

南野衛二

一、萬葉集と西行と良寛

帝大

大島文雄

一、知彼知己

駒井教授

一、閉會の辭

稻波爲孝

〔第三回〕 同二十六日午後七時より富山市佛教會堂に於て開催。

當日の聴衆は堂に溢れ、場内に入ることが出来ずして歸るもの幾何であつたか分らない。出演者辯舌も大いに冴え、堂々たる論旨と共に大喝采を博した。殊に當日來演下された武藤校長の二時間に亘る大雄辯は、其の質實なる四高的服裝と相待つて、多大の感銘を與へた。

一、開會の辭

金井久雄

一、主催者の挨拶

駒井教授

一、靜かなる暴風を待ちつ、

高峯一愚

一、勞資協調せよ

大河原保彦

一、眞晝間の幽霊

加藤清一

一、歌人としての正岡子規

帝大

大島文雄氏

一、日米問題

校長

武藤虎太氏

〔第四回〕 同二十七日午後七時より魚津町小學校に於て。

一、藝術鑑賞に就て

金井久雄

一、新しき文明への憧憬

高峯一愚

一、夢みつ、酔はされつ、

大河原保彦

一、人の下に立つの雅量

深川俊夫

一、民族自決より見たるアジヤ民族

三森良二郎

一、自らに救ひを求めん

加藤清一

一、偶感

駒井教授

〔第五回〕 同二十八日午後七時より泊小學校に於て。

一、開會の辭

沖 實

一、人に使はれても

深川俊夫

一、藝術鑑賞に就いて

金井久雄

一、新しき文明への憧憬

高峯一愚

一、夢に酔はされて

大河原保彦

一、世界に輝く東西の光

稻波爲孝

一、眞晝間の幽霊

加藤清一

一、偶感

駒井教授

一、閉會の辭

小澤久也

斯くして、久方振に行つた巡回講演も、成功裡に終つたのである。辯士一同大いに得る所があると共に、開催地の人々に多大の感銘を與へる所があつた。本年度も別の地方に於て、巡回講演を催さうと思つてゐます。因に此の企ての費用は各自自辯であつた。尚終りに、講演會開催地の校友諸君及先輩諸氏が、種々御援助下されたことに對し、深く感謝します。

○十月十二日 公開講演會を午後六時半より公會堂に於て開催した。

當日は聴衆は少かつたが、各辯士熱心に演説したことを喜び、會は十時五分終了。

一、開會の辭

部長

駒井教授

一、所謂思想的危機に瀕して

杉澤博吉

一、世界恒久平和の理想

湊屋清太郎

一、彼は飽き我は飢ゆ

生 魚 進

一、死の前におのゝきつ、

大河原保彦

一、競争が共存か

角 永 清

一、社會群の趨向と學徒の使命

萩森秀市

一、我國に於ける文化運動に就て

近藤俊二

一、新しき文明への憧憬

高峯一愚

一、地震につきて

稻波爲孝

一、國家協力觀の確立

瓜生順良

一、閉會の辭

加藤清一

○十月三十一日 金澤高工辯論大會に左の選手を派遣。同會中の白眉であつたと思ふ。

宗教私觀

南野衛二

○十月三十一日 午後二時半より富山市總曲輪小學校に於て、富山藥專との聯合演説會を開く。

一、民族の自滅を救へ

藥專

北脇甚左衛門

一、食ふと云ふ事の問題

同

三浦十郎

一、我國に於ける文化運動

本校

近藤俊二

一、永遠の生命を求めて

同

三森良二郎

一、婦人解放とその意義

藥專

高井 洋

一、眞實なる道を求めて

本校

佐々木境圓

一、教育制度の革新

藥專

龜井 芳

一、我觀日米問題

一、偶感

本校 田村仙定
藥專 本間重行

○筆を擱くに當り、靜かに過去を顧み未來を思ひつゝ、魂の底より響き出る心の叫びを益々大ならしめんことを誓つておきます。

(野生)

音樂部報

月日は本當に早い。今年も早や暮れて行つて了ふ。先學期に出す答の部報を少し都合が悪くなつて出して戴けなかつたもんだから、又之でお収めなるかも知らないから、迷惑だらうが少し餘白を食して貰ふ事にした。何しろ此の度から二頁以内と限られた相だから、ほんの要件のみ簡単に記して行く。今年の春、先輩、逸物として評判の良かった。牛、歌、曾、原四公を大學に送り出して以來、恰も燈の火でも消えた様な感じに急に淋しく心細くなつて、殘黨を見るに絃の方で僅か山田、森下、杉江、菅原の四人位で、牛公達の後繼ぎとして大打撃を受け貧弱さを感じたのは部内よりも却つて一般の者が、想像し過ぎた位だつたらう。而し實際窮して居つたが、窮すれば佛方便さやうで皆の忠實な頑張さは、一方ならず他の新部員の

心を刺戟した。先ず第一に催したのが、四高最初のレコードコンサートだつた。之は新人生歡迎及び部員の新募集を兼ねてであつたが、案外な好結果を齎した事には、本當に嬉しかつた。我部員もぞく／＼として集まり技倆も相當で練習するのみになつた。愈々譜も一揃へして開始したのが五月中旬で、其れ迄には、それは之れ迄に見た事のない苦勞を僕は嘗めた。而し、あの眺望のきく大廣間を開け放して透き切つた身にしむ様な朝の空氣に凜然として樂器にしがみ付き、後には血が逆行して顔がぼつさ赤くほてり頭がぼつさなる位まで行つたあの時の練習の美しいシーンは他では見られまい。松が途中でうなり出す。杉はたまんないを連發。菅はもう一丁行かうさ、山は加減する。さ云ふ様な風に、初めは出来ないかも知れないと心配された春季演奏會も、夫れ程貧弱さを表はさずに豫定通り無事済まされた事は何より嬉しかつた。勿論部員の元氣な眞面目な努力の外、部長の木村先生が大變勵まして下さつた事には感謝して止まない。又今度の絃樂合奏に、小田君のピアノ、寺西君のダブルバス、及び鬼頭君のフルートを入れた事は從來のオーケストラに比して一新紀元を劃したわけである。七月の末木村先生は東大へ榮轉する事になつた。部としても、又學校から云つても、多分先生の様に物のわかる話しやすい先生を見送る事は大變惜しかつたらう。而し何うも出来ない事だから大いに榮轉を祝福した。其の後、新部長は大藏先生に定まつた。先生も兎に角、ものゝ分る方だから、今

後色々御盡力下さつて部も愈々發展して行くのだと思ふと感喜に耐えない次第だ。昨年の春呱々の聲を上げた「學生聯盟」の演奏會は主人公の四高が、餘り乗り氣しなかつた爲め今年には未だ一回も開催されて居ない。醫大、高工の諸君には氣の毒だが而し全然中止したのではないから其の内に機會を捕へて盛大に行ふ積りで居る。其の爲め金澤市民の音樂熱は(何時でも冷たいが)愈々沈滞せしめ生氣ながらしめた事は事實だ。九月上旬先輩西願忠雄氏來澤、日々熱心に練習を見て下さつて一通りならず技倆向上した。何時もの通りにすれば三學期に行る答の演奏會を二學期に繰り上げて行る事にした。部員の多數が理科生と三年に多いので、勉強を餘儀なくされ、又一寸都合悪い事の生じた爲、未だ練習不足で、餘り上成績は擧げられなかつたが。兎に角、何處へ出しても恥しくない大曲を無事にすましたのだから部員の四高健兒としての生氣潑瀾たる眞面目さが、表はれて居るだらう。實際今日の部員は皆眞面目な良い人許りだから甚だ結構である。

十一月の大演習の砌、攝政宮殿下御台臨を期として、本當にあのせま苦しい部から云つたら天井の低い此の上もなく響の悪い講堂を是非改築して戴き度いと思つた。あの至誠堂は本當に行り切れない不適當な所だ。而し其の内によくなる事と思ふ。來年は部は本當に盛んになる。尙一層改善向上して立派な演奏振を發揮して愈々吾が音樂部の名を輝き廣めて欲しい。最後に此の前の二度の演奏會の目

録を左に記す。(十一月二十三日 山田)

春季演奏會 六月六日 (於至誠堂)

- | | | | |
|----------------|---|---|------------|
| 一、 | 部 | | |
| 一、マンドリン合奏 | 部 | 員 | |
| マリア、ルイザ | | | アシスチニ作 |
| 二、男聲四部合奏 | 部 | 員 | |
| ア、ハンテイングウィイルゴウ | | | |
| 三、絃樂合奏 | 部 | 員 | |
| イグノマル | | | アツシヤー作 |
| 四、ピアノ獨奏 | 小 | 田 | |
| 乙女の祈り | | | パダルドイスキー作 |
| 五、マンドリン四重奏 | | | 森下、横田、松本、谷 |
| ズバイ風組曲 | | | イ、エスチアンチナ |
| ハ、ボレロ | | | グラヂアニ作 |
| 六、獨唱 | 竹 | 内 | |
| 眞夏の夢 | | | 梁田作 |
| 七、マンドリン合奏 | 部 | 員 | |
| レナト | | | ベレンザー作 |
| 一、絃樂合奏 | 部 | 員 | |

部
員

杉江、駒井

……マ・ーサス作

飯田、松本、山田

コウイスキー作

部
員

…スタアルト作

部
員

モルラツチ作

杉江、織田、松本、菅原

モツアルト作

部員

…ベウエール作

小田

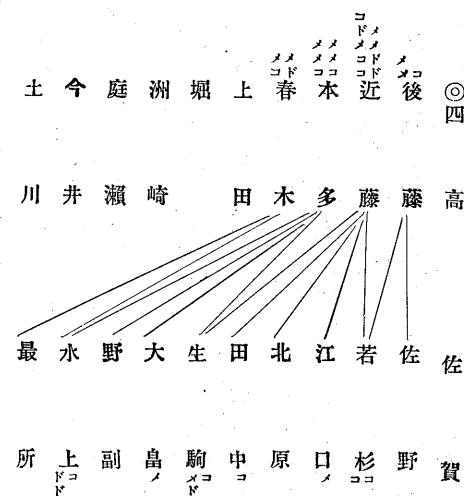
森下、横田、松本、山田

く六月にはコーチャーとして高師の中西、石田兩氏を派遣して下さつた。當時の吾々は唯意氣と感激さに燃えた一團となつて、必死の練習をしてゐたのである。かくの如くして練習は六月の終り迄繼續された。七月に入つて、十日に試験が終つてから四日間を我々は合宿に過した。

さうしても勝たねばはの必死の氣に自ら盾宇に表はれてゐた。一方於て、昨年は殆ど現在のメムバーで勝てた様なものであると云ふ安心が、吾々の心中何處かに潜んでゐたことも争へぬ事實であらう。さは云へ今日の吾々の悲運を果して何人が察し得たであらうか。劔道は氣を尊ぶものとは古からの言である。劔道に於ては勝敗は總で一瞬間に定まつて了ふ。自分でも氣付かないで打出した突嗟の太力で強敵を倒すことがある。それと同様に一寸した心の隙に脆くも弱敵に敗れることがある。その時々の様子で人の心が如何に變化して行くか、仲々解かるものではない。我々の敗因も、總てがホンの一瞬の精神作用からぐれて行つたのかも知れない。強敵を見て、死に者狂さなつた敵のマキシムコンデイションと、禦し易しと高を括つた味方のミニムコンデイションとが、合致して生れた當然の結果

果かも知れない。要するに吾々は、古から多くの刺客を出し乍ら、達人と云はるゝ程の人の極めて少ない斯道の、如何に吾々如き者の思ひも及ばざるものであるか云ふことを現實に知らしめられたのである。

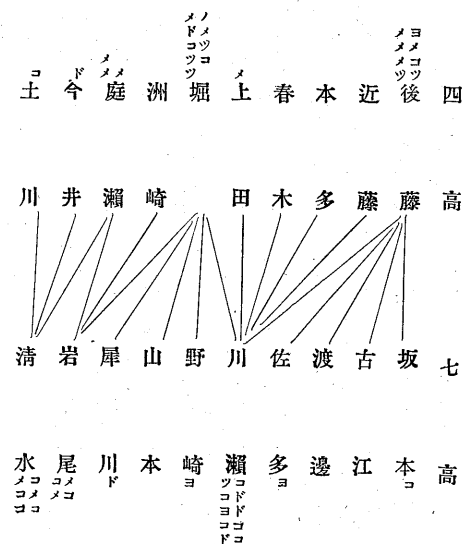
試合は十八日から始まつたが、我々の試合は二十日の、對佐賀高に始められた。



先鋒後藤は初陣の爲か、僅か一人を切つて例れたが、近藤、本多各々得意の技を揮つて、敵に息も繼がせず切り捲つたのは見事であつた。續く春木は古強者、悠々敵の大將副將の首級を上げた。

翌二十一日には、對七高との戦である。彼七高は九州の大会に於

ては、相當名を知れた強者である。さり乍ら洛陽の地に於ける戦には五高と云ひ六高と云ひ彼以上の強者は幾多ある。我等が眼中彼七高なく、戦はざるに敵を呑むの氣があつたのである。嗚呼さり乍ら、結果に於ては我々は彼に敗ぶるの失態を演じたのである。常勝軍を以て自ら任じたるは我等が堅陣は、彼等の一蹴する所となつたのである。



此の日後藤腕冴えて、敵四人を倒して勝利は我軍のものと思ひしに敵軍の川瀬奮戦して挽回し、我軍の堀出づるに及んで再び形勢彼に非となりしに、鐵壁と頼む我が軍の後陣脆くも破れて、凱歌は遂に彼に上つた。友軍一人として顔を上げる者なく、無念の涙に濡れ

て下宿に引き上げた。遂に我々は敗れたのである。一年間の苦心は水の泡となつたのである。

数日の後我々は六高優勝の凱歌の高く上るのを聞いた。今頃はあの優勝旗は、六高の道場を賑はしてゐることであらう。而して、優勝旗に附せられた、四つの北辰は淋しく輝いてゐることであらう。それと思ふ時、我々の胸は張り裂ける様だ。さらば我々は來年を期して雄々しく戦はう。

最後に、我々が勝つ様にさ熱心に應援して下さい諸君に對して、今日かくの如き不甲斐なき報告を齎らさなければならないことを、深くお詫びしなければなりません。

柔道部報

しき／＼と降りしきる寂しい夜、私達が感激の想一筋に、いそしんで來た過去一年間、否三年間を回想する時、色々な感が胸にせまつて來ます。あのクロノバ茂る仙石原で、諸君が激勵大會を催し下された時、私はきつ／＼六高を破つて、なつかしい旗を持つて歸

るさ、諸君に御誓ひ致しました。然るに九月、諸君が楽しい五十日の休暇を了へられて、歸校された時、無聲堂に來られて、どんなにか落膽された事でせう。然し私達の嘆きは、それは／＼諸君よりも痛切でした。其の上四高の選手として、諸君に對して濟まなかつたさういふ感が、全身を縮めたのです。すべてが實力の差であり、運命であるさういへばそれまでです。けれど、それ丈では到底私達は慰められませんか。男としての意氣地が立ちません。四高柔道部が、實力の差で負けた、運命を開拓する事が出来ないで敗れた。何度繰返しても、怨怒の涙が胸に溢れるのみです。然しすべては過去となりました。それをどんなに考へて見ても仕方がありますまい。私は、こゝで我部が如何にして、負けたかといふ事、云はば私達の醜態の歴史を、思ふまゝに並べますから、どうぞ怒らずに読んで下さい。昨年の九月以來、三度敗れて疲れた様な氣分を一新して、一層の緊張さを以て練習して來ました。冬の二週間の休は、東京に合宿しまして、五段小田常胤氏の寝業の組織的コーチを願ひ、晝は宿舍、帝大道場等で、夜は講道館で、毎日練習しました。又三月の休には寮に合宿して鍛へました。四月以來は新入生諸君を迎へて愈々活氣づき、東京、京都から代る／＼來られた先輩や、又多忙中であられた小田先生の、一週間のコーチに依つて、業の上に、精神上に、大いに進歩を見、大いに自信がついて來ました。練習法も、今年は、一時間半にわたる普通練習と、三時間程にわたる猛練習との二期に分けてや

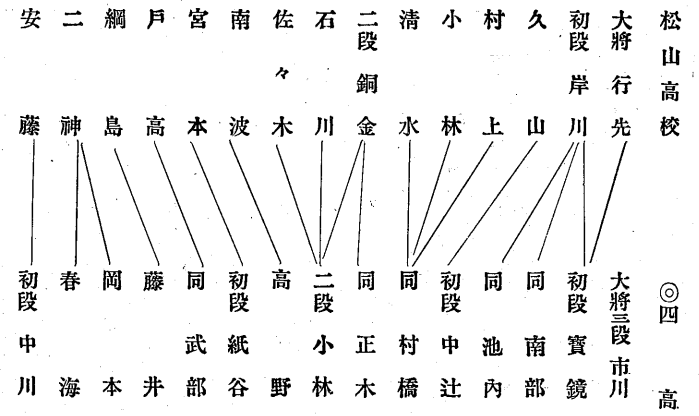
る方法をとりまして、選手の体さいふ事に一層の注意を拂ひ、又昨年等の失敗に鑑みまして、六月二十六日から七月七日迄全く練習を休んで、体を息めました。其の爲に試験で幾分元氣を失つた体も、一週間の練習の後、全く恢復して、試合の時には、体は最もよいコンディションにあつた様に思はれます。かうして遂に七月十四日が参りました。復讐に向つて進むべき日が参りました。午前七時道場に参集して、簡単な式を舉げて、なつかしい無聲堂に別れを惜しみ、元氣旺に「流水遠く」を高唱しつゝ、隊伍を整へ、三十の部員は尾山神社に至り、祈詞をあげて、神に復讐を誓ひました。そして午前九時、親愛なる校友諸君の應援を受けて、私達の列車は、金澤驛をはなれたのです。「勝つてくれ」とはげまされた諸君の聲は、どんなにか力強く私達の心臓を刺した事でせう。「どうかして勝たねば。」と思はず涙が胸にせまつて來たのです。午後六時には私達は遂に戦の原、洛陽の地に運ばれてしまつたのです。丁度十分前に入浴した六高の選手及び先輩、三高五高の代表者並に先着された我先輩の親切な出迎を受けまして、ブラツトフォームを出しました。六高の大將早川三段と我市川三段との握手は、私達に異様な緊張感を與へました。敵を遂に眼前に迎へたのです。忘れる事の出来ない武徳殿の瓦を、電車の窓から見出した時、血汐は更に湧き立ちました。その晩私達は先輩と四人で六高の宿舍を訪れ、金澤名物の長生殿を贈り、打ちさけて相語りしました。明日の敵は今日の友さても云ひませうか、親

しさを憎らしさを交つた様な、一種の感に打たれました。六高も岡山名物の鶴の卵さかいふ菓子も贈つてくれました。是で全く入浴の式次はすみ、愈々戦さいふ事があるのみとなりまして、一同圓かならざる夢を結んだのです。翌朝、選手は、大學の各校選手歓迎會に参りまして、抽籤をやりました。豫選に松山、七高に當りました。七月十六日遂に戦の火蓋はきつて落されました。二十名の先輩に導れて、部歌を高唱しながら武徳殿に乗り込み、北辰の輝の前に恰も敵なき勢を示し、手ごわかつた松山高校も第三メンバーで打破り、九州の兵、七高をも難なく降服し、かくして豫選には立派な戦跡を残しました。第三日には二勝者として三、四、六高及び大阪醫大の四校が残りました。抽籤の結果、我校は三高と對する事になりました。然し之も諸君の御力によつて幸にして打破る事が出来まして、二十一日遂に御敵六高と見える事になつたのです。選手の腕はどんなに鳴つた事でせう。如何に六高の防備固くさも、きつて破つて見せる、と一同誓ひました。その前夜は、就寝時間が來ても、どうしても寝られないさいふ者も多数ありました。一ヶ年の間、一時さしても忘れた事のない、六高、それが明日、そうた明日だ、と思つた時、どんなに嬉しかつた事でせう。午前三時頃漸く、先輩は大將市川君等と熟考に熟考を重ねて、最後の策案を終へ、メンバーを作り上げました。そして選手の寢所を絶間なく訪れて、体をきづ

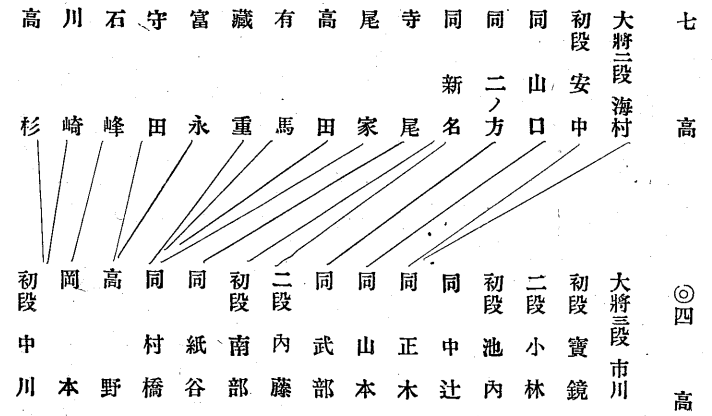
かつてくれました。かうして私達一同心を一にして、只明日の凱旋を期したのでした。嬉しいそして恨めしい曉の鐘は遠く響き渡り、私達は決意の水杯を交し、武徳殿上に、五尺の体を投げ出したのであります。然し結果は遂にあれでした。そして七星輝く紫紺の旗は、眼前にありながら私達の手に觸れようとしませんでした。殿上に充てる觀衆は寂として音も立てませんでした。やがて十五の六高の武者は、私達の眼前に立ち並びました。諸君、旗は遂に荒木京大總長の手によつて、六高に渡されてしまひました。泣いて拍手をしたのは誰でせう。私達でした。四高の選手でした。實力の差を持つた私達でした。運命を打破る事の出来なかつた憐れな私達でした。四高の名を汚した私達でした。諸君何卒許して下さい。あれ程熱列に勵まして下さつた諸君に、こんな憂目を見せたのは、確に私達の努力が足らなかつた爲です。何卒許して下さい。六高は直に祇園で祝勝會を始めました。私は弱者として意氣地なしとして、屈辱的にも御祝の酒を持つて六高の門に参りました。「あはれ弱者さなる勿れ」諸君が歌つてゐられる寮歌があり／＼と耳に響いてきました。其の晩選手は泣きました。然し諸君、選手は一人として自己の全力を捧げ、死を期して戦はなかつたものはなかつたのです。決して決して選手を責めないで下さい。私共の努力が足らなかつた爲ですから。流水は滔々として流れ淀まずと歌つた我柔道部は遂に淀みました。

未來永久に勝を續けるさ傲語した事も遂に理想であつて、實現されない事となりました。けれど近い内に、否來ん年には、きつと諸君の御援助によつて、昔の流にかへるでせう。何卒學校に残られる諸君は勿論、卒業される諸君も、御同情下さつて、選手を勵まし、援助して下さい。今迄は兎角、道場は選手獨占の様な傾がありましたが、今後はどうぞ多少しても御經驗あり、趣味のあられる諸君は、暇がありましたら、遠慮なしに御出になつて、練習して下さい。着物なんかも古いのが、幾らも或る様ですから、勝手に使つてやつて下さい。今夏即ち八月一日から四日間、北陸關西中等學校の大會を催しました。参加校は十八校程ありましたが、北陸方面はどうしたのでせうか、あまり成績が芳しくありませんでした。優勝戦は京都の平安中學と、廣島の廣陵中學とで、平安中學が遂に勝ちました。諸君の出身中學に、勧誘して下さいん事を切に御願ひ致します。今年度は、大將に初段中辻君(理二)取締に春海君(文二)が決定しましたから、一寸御報らせしておきます。近い内に寒稽古もありますから、何卒多数御出席あらん事を御願ひします。最後に今年の南下戦の成績を参考迄に記しておきませう。

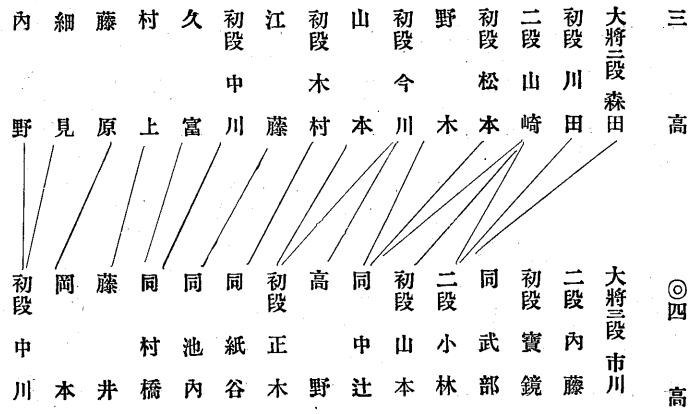
第一回戰



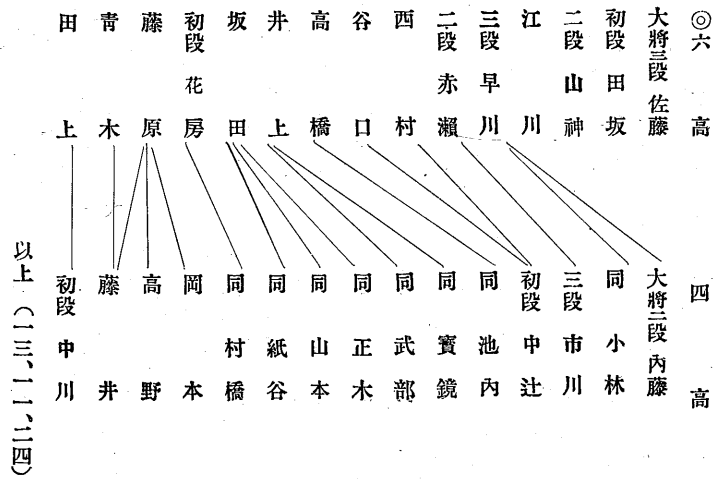
第二回戰



第三回戰



第四回戰 (優勝戰)

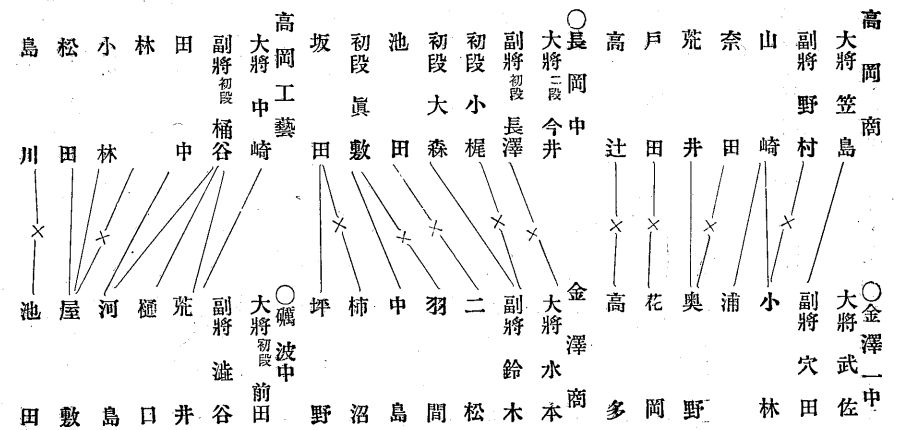
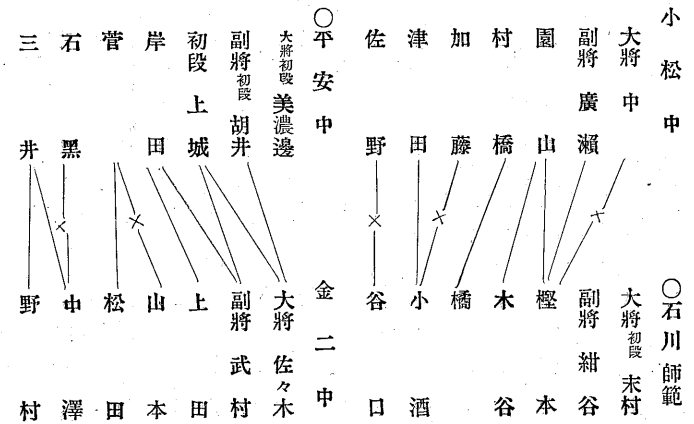


中等學校大會記

我部主催第十回北陸關西中等學校柔道大會は八月二日より左の如

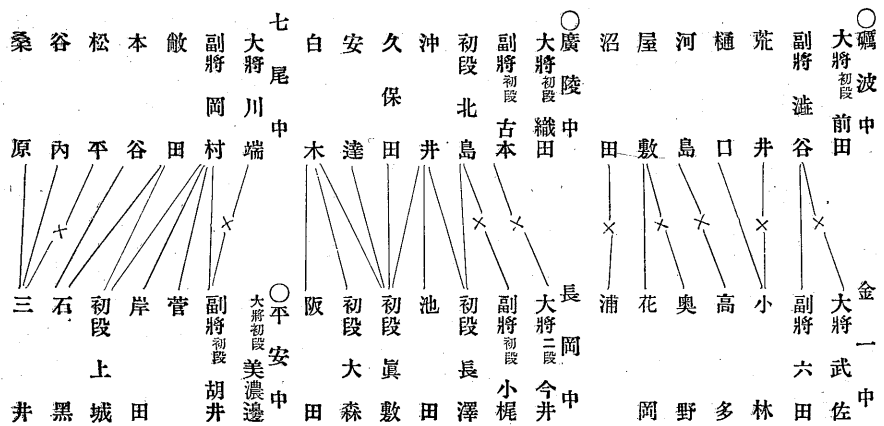
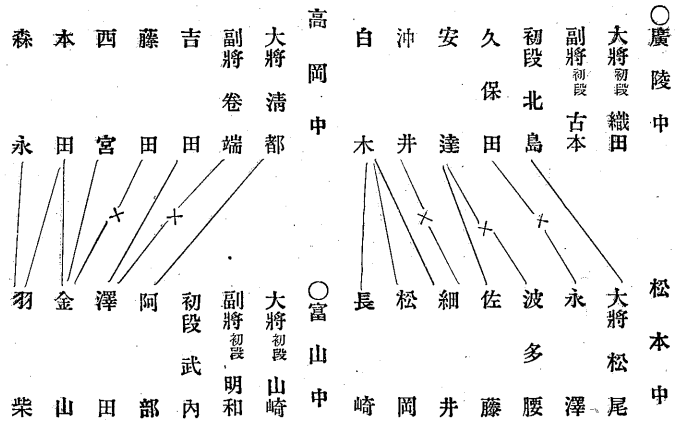
く、無聲堂において舉行されたり。集るもの十五校、強きは残り、弱きは退き、稀に見る大接戦の後、桂冠は洛陽の猛、平安中學が上に降るに到れり。(○印勝)

第一日(第一回戦)



斯くして第一日を終る。遠来の廣陵、平安、長岡中學意氣盛んなり。隣縣富山は、又悔るべからざる腕前を有する、富山、礪波の兩雄あり。縣下の残るもの三、曰く七尾中(不戦一勝)金一中、石川師範。

第二日(第二回戦)



○富山中 石川師
大將初段 山崎 大將初段 末村
副將初段 明和 副將 紺谷
初段 武内 初段 榎本
阿部 木谷
澤田 小酒
金山 谷口
羽柴 橋本
(代表戦)
初段 明和 榎本
(第二次代表戦)
○阿部 紺谷
富山中對石川師は豫期の如く大接戦となり、先鋒より大將に至るまで全部引分、代表戦においても尙勝敗決せざりしが第二次代表戦に於いて、富山阿部の活躍効を奏し遂に石川軍退く。この日、縣下の三雄、遠來軍のため、悉く破られ、顔色なし。されど七尾の岡村、一中の小林、奮闘して僅かに縣下軍のために氣を吐けり。残るは四強豪。礪波中學、廣陵中學、富山中學、平安中學。形勢未だ混沌として定らず。

第二日午後 (準決勝戦)
礪波 中 ○廣陵 中
大將初段 前田 ○大將初段 織田
副將 澁谷 × 古本

荒井 北島
樋口 安達
河島 久保田
屋敷 沖井
沼田 白木
富山中 ○平安 中
大將初段 山崎 大將初段 胡井
副將初段 明和 副將初段 美濃邊
初段 阿部 初段 上城
澤田 菅
武内 岸田
羽柴 石井
金山 三井
金部 ○美濃邊
(代表戦) 阿部
第三日 (最優勝戦)
廣陵 中 ○平安 中
大將初段 織田 大將初段 胡井
副將初段 古本 副將初段 美濃邊
初段 北島 初段 上城
沖井 初段 上城
久保田 三井
白木 石井
安達 菅

(代表戦) 初段 北島 ○初段 美濃邊
燦たり！ 洛陽の雄平安中學。

個人賞
富山縣 富山中學 初段 山崎 安三
新潟縣 長岡中學 初段 眞敷 龍吉
石川縣 七尾中學 岡村 孝一
廣島縣 廣陵中學 初段 織田 勳
以上

明治神宮試合記

一、石川縣豫選 (十月十二日 於金澤武徳殿)
青年組 (滿三十歳以下)
○(四高 市川三段(大外刈)
輪島 上野二段

少年組 (滿二十歳以下)
○輪島 上野初段(左拂腰) ○(四高 高野(逆襟締)
七尾岡村 輪島 上野初段
○(四高 高野(右浮腰)
七尾岡村

かくて、石川縣選手権は青、少年組とも四高の得る處となりたり。
二、北信五縣豫選 (十月十七日 於富山武徳殿)
青年組

○富山 志甫四段 ○富山 森内初段(左跳腰)
○石川 市川三段(横四方固) 石川 高野善一
長野、新潟、福井、三縣は何れも棄權。
かくて、四高よりは市川三段のみ北陸選手権を得。

三、明治神宮試合 (十一月一日より)

我が市川三段の参加せる青年組選手権試合は十一月二日、明治神宮にて開かれたり。この試合に於ける市川三段の戦績は次の如し。

近畿代表 庄野三段
北陸代表 市川三段 (崩上四方固)
東海代表 山中四段
關東州代表 市川三段 (崩上四方固)
二宮五段(逆十字締)
市川三段
(五段二宮宗太郎氏は青年組日本選手権を獲得せり。)

野球部報

三學期の試験も終つて、長い間北國の冬を飾つて居た雪が解けはじめ、春を待つて居た若草が萌え出す、もう我々は來る可き練習

の日を待ちわびるのだった。雪がすっかり解け切つて、遠山の残雪が白銀色に輝く日は来た。三月二十日から部員は合宿して今年の練習を始めたのである。

憂さ音して、三寸の白球、春の空高く飛ぶ時、我々の胸は又新しい希望に燃え立つのだった。

四月、小泉、本田、白井、服部、平井等の新部員を得てからは、必死の練習を開始した。部員の胸の中には、只復讐の二字あるのみである。花は匂ひ鳥は歌ふ、人は皆行樂の杖をひいて、野に山に春をたづねる、かうした事をよそにして、我々はひたすら技を磨いて行つた。其の内に、はる／＼先輩も来て下さつて、色々指導して下さい。先輩に對しても我々はズボラな練習が出来やうか。毎日の練習の終はるのはいつも仙石原に夕闇が迫つて来る頃だった。

櫻も散つて、若葉が薫る頃になると、我々の練習は文字通り猛烈を極めた。然しこの頃から選手の或者は打撃の谷に苦しめられ出した。六月に入つて其の谷は續いた。而も一人ならず數人の選手がこの谷に陥ちて苦しんだ。試合の日は益々近くなるし、選手の心はただあせるばかりだった。餘りの残念さに、練習終つた後、夕闇の中にバットを抱いて、泣く目が續いた。然し、一番氣にして居た梅雨の天候が意外にも好かつたので、我々はほんきに嬉しかつた。其して一日も早くこの谷から脱しやうとしたのである。毎日々々暑い夏の太陽が輝いて居た。六限の授業が済むまでの物うさ、身體がだる

いし、欠伸は出るし、其れでも、授業がすんで、グラウンドに出て、バットをにぎるさ、今までの物うさも、眠氣も何處へやら行つてしまつて、五尺の身體の中、たゞ眼に見えない或る力が充される。そして日没まで、汗さほこりにまみれて目醒ましい程の練習を續けた。難物の試験が目前に迫つて来た。其の頃はもう我々の心身はすっかり疲勞してしまつて居た。而も我々の打撃の谷はまだ完全に元に復して居なかつた。

かうした不安な日の後、而も試験を目前に控えて、我々はコーチヤーとして、現グイヤモンドクラブの宿將石川氏をお迎へした。我は一時に百萬の味方を得た時のやうに、勇氣百倍して、試験も何のその、専ら石川氏について、指導をうけた。選手の意氣天に冲するものあり、加ふるに石川氏のコーチは實に懇切を極め、我々は又氏を師父の如くに思つて、猛練習に寸刻を惜しんだ結果、試験が始まつた頃には嬉しや、選手の打撃は又元に復したのであつた。我々の胸は喜びと感謝に充ちた。かくして、石川氏の歸られるや、直ちに先輩の送られた、早大選手河合氏来り、又熱心なるコーチを受けだ。かうして試験の終つた頃には十分自信がついた。今年こそは！口に出さないが、選手の胸は高鳴つたのである。

かくして、七月十二日八高軍を金澤驛頭に迎へる日は来た。八高軍を迎えてからは、我々の敵愾心はいやが上にもそゝられて行つた。そして、去る年の血と涙の日がまさかと思ひ出されるのだった。

七月十四日、戦の日は遂に來た。空はきれいに晴れ渡つて赫灼たる夏の太陽が、照りつけて居た。午前十一時選手一同純白のユニホームに身を固めて、公園に集つた應援團の前に整列して勝利を誓つた。勝つてくれさふ激勵の聲を聞いて、我々の胸は迫つた。熱い涙が頬を傳つた。やがて、音に血を盛るの歌と胸にしみ渡る大太鼓の音に送られてグラウンドに向つた。仙石原頭には、戦はざるにはや殺氣が漲つて居た。

かくして午後一時戦の幕は切つておこされた。(記録帳が見當らないので、戦況をお知らせする事が出来ません。御寛容を乞ふ。)

二回目まではお互によく守り点をなさなかつた。我等は過去一年、血と涙で鍛え上げた腕をふるつた。意外にも敵の力は大きかつた。我々は全身の力を出し盡して之を支へた。然し遂に嵐がやつて来て、物凄風は仙原の砂塵を捲き上げ、さもすれば我々の身體さへ空中高くもつて行きそつた。唯一の頼として居た渾身の力もはや盡き果てしまつた。我々の目には、一点二点と増して行く敵のスコアの數字さ、紅と白の旗のみが、いら／＼しく見えるのみ。玉なす汗に身體はじつさりこねれてしまつた。かうして齒をくひしげり、あるだけの力を出して最後まで闘ひ終つた時、我々の身體は地に倒れて氣息咄々、立ち上る力さへなかつた。涙はさめごもなく流れる。敵の凱歌が上る。應援團長の「坐れ」の聲が聞えた。

あゝ、惨敗。あゝ、惨敗。何と云ふむごたらしい最後だ。之が一年

間の血と涙に對する報酬か。之が吾が四高、吾が野球部の歴史に與へ得た最上のものか。吾が校友に與へ得た最上の報酬か。この惨敗が、この惨敗が。

十六對三、涙に霞んだ眼で見たスコアボードの數字。無念の涙が、陳謝の涙が。

許るせ、八百の校友よ。我々はこれ以上云ふ可き言葉がない。月並みの言葉だが來年を期すのみ云ふより外ない。敗因もよく分つて居る。そして、我々の胸の中には固く誓つた或るものがある。來年こそは。

最後に盛夏の炎天を物とせず、熱烈な應援をして下さつた事を心から感謝致します。

校内試合

今年は雨が多い事だらうと思ひ又大演習もあり日時に餘裕がないものと見て、例年の各クラス對抗試合を止めて、各年級別文理科對抗試合を行つて見ました。結果はあまり香しくありませんでしたが、右のやうな理由があつたのですから、悪しからず御了解下さい。幸ひ優勝戦も終る事が出来て、吾々は非常に喜んで居ます。左に取組及戦跡を示します。

(第一回戦)

○文二—理一

○理二—文三

○理三—文一

(第二回戦)

○文二—理二

理三—不戦

(優勝戦)

○理三—文二

最後に文科對理科の試合を行ふ筈でしたが理科軍の方に不参の者があつたために、中止しなければならなかつたのは残念に堪へません。(吉田記)

庭 球 部 報

夕暮が今年にも迫つて來た。戦終つた今過し日を回顧して何とも言へない氣持がする。私等は今校友諸兄に向つて「すまなかつた」と言ふに先立つて總をこゝに報告しそして自分等の未來に向ふ心根をもお知せし度い。

去ぬる四月—さうだ春の曙の暖い光がこの陰鬱だつた北陸にも惠まれた時。木さいふ木、草さいふ草、すべて生物と名のつく物が

先を直に名古屋高商に向けた、だが入洛中の彼は遂に我に戦ふの機會を與へなかつた。自分等は仕方なく名古屋俱樂部の老練手と愉快に練習をして歸つた。そして直ぐ我校主催大毎後援の下に全國中等學校庭球大會を催した。集ゐ來つた校數實に四十三、激烈な戦は三日間續いて遂に覇權は岐阜中學の手に歸した。第一學期の仕事は兎も角も是で終つた。私等は各自英氣を養ふべく銘々故郷を訪れた。秋は來た自然は俄に涼味を加へた。私等は青空を戴いて再びコートの友となつた。第一學期のあの仇を今度こそ報いたいと十分の自信を持つべく猛練習を續けた。自信はついた、戦は初つた。高工を六對三にて打ち破つた我が軍は同じく高工を五對四にて破つた醫大と對陣した。

大正十三年十月十二日は遂に來た。空は何も知らぬ我等を憐むが如くどんより曇つてゐた。火蓋は切られた。あゝ言ふまい、書くまい、思ふまい、考へまい、この胸がこの胸が烈けさうだ。餘の事の無念さに、この人も許し我も許しながら自信ある暗の戦ひに、勇しかるべき仇打の日に、あゝ何たる事だ！ 若人には測られぬ程の意氣を持たせたいものだ。七月八高と對陣した時の様な元氣が何處へ去つたのか？ 神が我等に再び不運を齎したのか？ 我等の腕が劣つてゐたのか？ 問ふて呉れるな。總が運命の神の支配の下にあるのだから、荊軻易水に望んで「風蕭々」を吟ぜし時彼の血はおどつた。然し神は彼に與しなかつたのだ。我等の胸は愛校の血に燃えて

体内に制し切れぬ弾力をもつた心と歡喜と頌笑とをもつて目映しさに春の光を見上げた時—私等不運の部員達も薄い微笑に春を味つた。だが自分等の心には呪はれたる先人等の悲痛の涙、無念の思が凝り固つた或るものが秘められてゐた。眞の男と言ふ者は例へばどんな逆境に居ても必らずその境域より逃れんと努力するのである。さもなくば死人である。自分等もその男であつた。「俺達はどうかして明るく域に達し度い」斯うした考が積り積つて遂に固い決心となつて胸に印せられたのである。其日から心に少しの緩みなく來る日も／＼人が春を享樂の内に味つてゐる時自分等は沈黙の内に緊張した練習をコートに續けた。そして春期リーグ戦に望んだのである。だがどうしたのだらう、私等には信すべき腕があつた。愛校の精神は他の誰にも負けはしない。而も醫大の爲に敗れた、運命は又も我等を逆境に落したのだ。だが一度の失敗に懲りてはならない。頑張りうさ決心した。自分等は再び沈黙の努力を忘れなかつた。七月が來た選手激勵大會の日の我等は不面目だつた。淋しかつた。だが胸には決心と計畫があつた。我等は遂に立つて東海に覇を唱ふる八高に挑戦したのだ。だが「學校の都合」が許さなかつた。併し自分等は「東海遠征」の名義の下に表日本に兵を進めた。熱い血潮は胸の内に高鳴つてゐた。運命の神は自分等を見て頌笑を漏しただらう。勝利は我等に歸したのだ。勝に驕らぬ我等は血を拭つた鋒

ゐた。然も神は我等を見なかつたのだ。諸兄にすまない、心から詫る。だが我等は其の日固く誓つたのだ。

自分等は決して倒れて止む者ではない、今から一層沈黙の努力を續けて行かう。總の希望は未來に記して、未來にはこの不名譽を償ふべき時があるのだ。敗戦の將は忍んでその日を待たう。神が笑はなく共、敵が如何に強い共、未來に於ては吃度あらゆる戦に勝つて見せよう。許して呉れ友よ。

大正十三年度北陸春期硬球リーグ戦々績

四 高 ○醫 大

ダブル

小 熊 増 谷
原 上 坂

日 比 野 岡 本
内 藤 岩 佐

石 坂 山 本
伊 庭 名 越

シングル

原 増 谷
小 熊 名 越

石 坂 岩 佐
伊 庭 山 本

○石坂 六 二 上坂

日比野 三 六 山本

五對四にて醫大勝。

漕艇部報

三學期の試験がすみ、軽い気持ちになつて、部員一同寮に合宿し、練習や新入生の勧誘やらに、二週間の間愉快な気分を過した。三月は云へ、天候に恵まれぬ、金澤の地では、未だに雪さへもちろつて、思ふ様に、出艇も出来ず、ストーブを圍んで、徒らに、髀肉の嘆を洩らすより他に仕方がなかつた。

ごこか、素張らしい遠漕がして見たい。その頃から、こんな事が、話題の中心になつて、夜おそくまで、地圖を廣げて、瀬戸内海を一週しやうなんて、大きな氣焔を上げるものも、少なくなかつた。丁度その時だつた。御敵六高が大毎の後援を得て、大阪遠漕をやつたのは。堂々たる記事や、寫真なんかまで新聞に出され、みんなの興奮は、いやが上にもつりのつた。先手を打たれて、出し抜

泊。運河を抜けて、江戸川に出で、豫定通り四時半、松戸に着いて一

四月二日、この地に合宿練習中であつた商大クルルの見送りを受けて、午前八時半松戸を出漕。逆風、逆流を力漕すること五里、思はぬ手間を取つて、二里八丁の運河口に達した時、既に正午を過ぎてゐた。

堤の上で晝食を食つてゐる中に、だん／＼空模様が變になつて來た。遂に運河が出る頃から盛に雨が降り出した。豁然として眼前に展開された、大利根の風情も、雨に煙りて詮方なく、午前の難漕に加ふるに、雨と風と寒さに見舞はれ、漕げども漕げども、船全く進まず、野氣糞になつて、殆んど漕ぎ通し豫定地布佐に着いたのは、最早や日のさつぷり暮れて七時頃、すぶ濡れになり、がた／＼震へながら死んだ様になつて、宿まで歩く事すら出来なかつた。みんな泣き面をしながら、心の中では、ひそかに、明日の雨を祈りたくなつた。

四月三日 雨中の力漕で、完全にへたばつたクルル一同は、出發の豫定時刻八時を打つても、なか／＼起きさうにもなかつた。雨はさうやら止んだが、今にも降り出しさうな空模様に出るか出ないかで、随分議論を戦はしたが、結局「六高を破る爲」といふ大切な日頃のモットーに勵まされ、九時半、見電む様に廣い大利根の深い朝もやをおし分けて、オールの響も勇ましく漕ぎ行く中、既に雨も全

きの功名を、せしめられた様な氣がして、ちつとしては居られなくなつた。

「何を生意氣な、負けてたまるものか。」

話は急に運んで、早速利根川遠漕をやる事に一決し、夫々東京の先輩や、一高短艇部なんかさも打ち合せをし、三月二十四日、一先づ合宿を切り上げ、先發隊として、矢坂、藤田の二名が、急遽東上して、諸般の準備を整へることになつた。

三月三十日 一同打ち揃つて、東上の途についた。何さなく、晴れ／＼した元氣がみんなの頭に充満して、南下する時の氣分さは、又一種變つた氣輕さで、東京へ着くのが待ち遠ほしてならなかつた。翌朝七時頃東京驛に着、先輩と共に赤門前上村屋に投宿。色々先輩やコーチャー等から、遠漕の豫定や注意を聞き、眠られぬ一夜を過した。

四月一日、いよ／＼利根川遠漕の日は來た。北國では見られぬ春日和のうら／＼かさ、「隅田川を漕ぐんだ」と云ひ知れぬ喜びに、一同の元氣は百倍した。午前九時、一高艇庫を發し、櫻の花のほころびそめんとする、墨堤を左右に眺めつ、漕ぎ行くみんなの心は、何さなくほ／＼みたくてたまらないと云つた様な、氣分で一杯だつた。「都島にも、しばらくの、別れ告げよか、運河口」いつも囁ふ歌を、實感しながら、のんびりとした氣分になつて、漕ぐのも、嬉しい極みであつた。

く上り、順風順流に、矢の如く艇は進んだ。豫定より二時間も早く、十二里の航程を漕破し、四時佐原についた。

四月四日 いよ／＼遠漕の最後の日となつた。空には暗雲低迷し、風又非常に強く、波も可成り高かつた。遠漕で一番困る、横波逆風で、艇足が薩張り鈍つてしまつた。霞ヶ浦を過ぎた頃から川幅は急に廣くなり、波は高まる一方だつた。先年商大のクルルが遭難したと云ふ、豐山附近では、物凄く許りの横波を食ひ、灰色の空の下に、風におの／＼枯す、きを眺めては、そ／＼に當時の慘狀が偲ばれて、慄然たらざるを得なかつた。

空はいよ／＼險惡に、逆風は益々猛烈になり、加ふるに上げ潮に惱まされ、眼前に銚子の町を眺め乍ら、もごかしい程艇は進まなかつた。

「最後だ、頑張れ」コックスは聲をからして叱咤する、漕手は泣かん許りに力漕に力漕を續ける。さう／＼日が暮れ、雨さへも降り出し、燈臺に灯がさもつた頃、辛うじて、銚子にだざりついた。死物狂ひ、ほん／＼に、死物狂ひの頑張りだつた。その夜は銚子第一の大新旅館に宿をとり、まるで六高に勝つた様な、氣持ちになつて、夜更くるまで、大氣焔をあげた。

四日間の遠漕、しかも二日目と四日目は文字通り大難漕であつたにもかゝらず、元氣でよく頑張り無事五十里の航程を、漕破し盡した事は、たまらなく愉快な事であつた。六高が大阪遠漕で大切

な選手二人まで倒した事に比べてどれだけ好成绩を収め得た事であらうか。

× × ×

兼六公園の櫻も今を盛りと咲き匂ふ頃、角張った帽子に、白い二本筋を、巻きつけた。新しい四高生が澤山入つて来て、皆の心も急に春らしい清新さに魅がへつて来た。四月十六日、これら、意氣と希望とに燃えたつた多数の新部員を迎へて、吾が部は盛大なる歓迎會を開いた。

「諸君よ、おん身等は高校三年の生活に於て、何を得、何を學ばんとするか。」

先輩、マネージャー等交々立つて、懇々と、ボートマン、ライフの意義と感激とを説き、若き彼等の胸に、多大の感動を與へ、あくまで、四高漕艇部の爲に盡すべきを、男々しくも固く心の奥底深く誓はしめたのであつた。

いよいよその翌日から、新しくレギュラーな練習は始められた。

或は科學的に、或は分解的に手をさる様にして導き、殆んど旬日を出でずして、皆見違へる程の上達を見た。練習の時も、散歩の時も、常に一致の行動をとり、既に我々新舊部員の間は、離るゝ事の出来ない友情の絆で、美はしく結びつけられたのであつた。暖かい春の一日、大野の清流に船を浮べ、柔らかなオールの影響を耳にする時、若い我々の胸は、言ひ様もなく、高鳴るのを禁する事が出来なかつたのである。

たのである。

東京からは、海内、水谷兩先輩、暇ある毎に來澤せられ、未熟な我等を、氣持のよい温情を以て指導され、京都からは先輩山田法學博士、笹川、廣瀬兩氏、バツク臺に或時はコックス臺に坐つて、叱咤激勵され「今年も勝つて呉れ」と、心をこめた言葉に對し、我は何でそこに感激がなからうぞ！ 感奮がなからうぞ！

四月も終つて部員は、文科理科に分れて、それ／＼技を競ふ事になつた。土曜日には、大野に合宿して練習したり、或は河北潟の一周を數時間でやつ、けたり最早や此頃では、新舊部員の色彩は、殆んど分らなくなつた程、對科の猛練習は、我々の技倆を進歩させたのであつた。かくの如く、五月中の練習は春季ボートレースを前に控へて居る爲、お互に清い敵愾心に燃えながら、一層懸命に練習を勵んだのである。

それらの感情も、六月一日のレースがすんだその時から、泣いて笑つて、奇麗さつぱり水に流し元々通りに歸つて、今度こそ、眞剣に六高相手の練習に、まじりかゝつたのである。

レース當日、懇々御來澤下さつた東京、京都の多數先輩の前に、我々部員一同は、ひざまづいて悲愴なる、激勵の詞を受け、たゞ榮ある勝利の爲には、死すとも、苦痛を忍ばねばならぬのを、しみじみ深く、感じさせられたのであつた。

大會がすんで、對校選手のビッグアップに先輩諸兄は、色々と頭

を悩まされた、結果次の如く二三年の舊選手のみを以て、クルーを編成する事になつた。

舵手	藤松磐石	文三	(身長)五、二五	(体重)一四、〇〇
整調	矢坂留治	理三	五、六〇	一七、一〇
五番	市川	勇理二	五、五六	一六、八
四番	増田音次郎	理二	五、八一	一九、四
三番	時田弘儀	理三	五、八三	一九、五
二番	近藤正造	理三	五、七八	一九、二
軸手	三輪勝治	文二	五、五八	一七、四

選手監督 河内虎夫

昨年のクルーに比して決して優ることも、劣らぬものである。舵手藤松は一昨年第一回の對校選手として軸手を務めたが、昨年は病氣の爲退き、今年再び起つことになつたので、漕手の方で昨年と變つたのは五番市川唯一人である。元來ボートは、他の部と違ひ、体が大きくて、腕さへ強ければそれでよいと云ふのではない。クルーの生命は、ユニフォームミチである。七人の心が、ピッタリ合つた時に生ずる團結の力である。誰れ一人異端者があつてもならない。

意志の疏通を缺いたり感情の衝突は、全くクルーの破壊である。

實力よりも人格であり、意氣であり、そして頑張りである。無理も苦痛も一々云つて居てはきりが無い。自我を没却したハンパルな氣持であらねば、ほんたうに、ボートの選手にはなれないのだ。

俗に云ふ「板子一枚下地獄」だ。ボートに乗つた以上は舵手の命令は絶対的である。漕手六人の手足は舵手一人の手足の様に、自由自在であらねばならぬ。オールを把つた以上、倒れる迄漕ぎ盡さればならぬ。斃而後已の精神こそ、實に尊きオアスマンスピリトであるのだ。

時は六月十四日、激しい初夏の太陽を、まことに受けて、海路片山津遠漕を試みた。正式の練習を始める第一歩として遠漕は缺くべからざるものである。午後三時半第一、第二の兩クルー軸を並べて、大野河口を、波高き日本海に乗り出し、日の暮れぬ中に、寸時の餘裕もなく頑張り續けたが、風浪に妨げられて、思ふ様に船進まず、安宅の河口に着いた頃、既に六時半、夕陽は將に波の彼方に没せんとして、空も海も物凄く許りに、眞紅色に染められ、雄大と云はうか、莊嚴と云はふかじけとは、漕ぐ手を休めて呆然たらざるを得なかつた。然し、それもほんの瞬時、全くそんな呑氣な事を云つては居られなくなつた。風は一刻一刻強くなり、山の様な浪はボートを木の葉の如くに弄んだ。見る見る東の方からは、眞黒な雲が一面に擴がつて来た。薄暮と怒濤の爲安宅の河口がどの邊であるか、薩張り見當がつかず、岸に立つて居た漁夫には、聲を限りに叫んだけれども如何にせん、波の音にさへぎられて、何等の手ごたへさへもなかつた。不安と絶望とに、我々は生きた心地もなかつた。

陽は既に没して黒雲は全く天を蔽ひ雨さへも加つた。今は瞬時の

猶豫もすべしには非ず。絶對絶命運を天に任せて力の續くかぎり一直線に岸に向つて突進するより他にさるべき手段はなかつた。然し自然に對し我々の力は餘りに貧弱だつた。今一息さいふ所まで漕ぎつけた時、山の様な大浪はまた、くまに、あの大きな舌を擡げて、ボート諸共巻き込んでしまつた。あッと思つた瞬間、七人の頭には、死んでもボートを壊はしてはならぬと云ふ意識が稲妻の様に閃いた。あはや、第二の大浪がボートを岸に打ち上げて木端微塵に打ちくだかんとした、刹那、死物狂ひになつた七人の團結の力は恐ろしかった。

ほつさして夢から醒めた様に氣がついた時、我々は始めてボートが安全な所に引き上げられて居るのを知つた。もう大丈夫だと思ふさ急に、牀の筋肉が弛んで、一步も動くこゝさへ出来なかつた。お互にうるんだ目を以て、顔見合せるだけで、しばらくは、言葉も出なかつた。

急を聞いて附近の漁夫及び村の青年團等が馳せ参じ第二クルーの方は無事救助繩で、岸に引張り上ることが出来た。

最早や、あたりは、もの、綾目も分らぬ位で、途方に暮れた我々を助けて、舟の水出しから川に引き下すまで多數のそれらの人が手傳つてくれて、どんなに心強く感じたか知れない。九時頃疲勞さ空腹さ寒さまで命がらゝ自動車まで小松まで行つて泊つたが、何だかその夜は興奮して寝られなかつた。

だらう。

試験が終るさう、大野の合宿所に移つた。

レースまで最早や二十日餘りしかない。東京から先輩の好意で西川昌氏を専任コーチャーとして招聘し海内、水谷兩先輩も合宿を共にして、いよゝ猛練習にさりがつたのである。

時恰も八月十四日、大舉來襲せる八高軍の爲に歴史に誇る我が仙石原は、無慘にも蹂躪され、四高の名譽は地に落ち、吾等八百健兒の誇りは跡方もなく消え去つたのである。

嗚呼 敗殘の悲哀！ 敗殘の悲哀！！

吾等は親しくこの光景に直面して果して何を感じたであらうか。

おゝさうだ。負けぢやならない。俺達は死んでも勝たねばならないのだ。負けて泣く涙があつたら我々は潔く今流し盡さう。負け泣くのは卑劣だ。努力が足りなかつたからだ。

翌日から我々の練習はどんなに物凄かつただらう。たゞ勝たんが爲、先輩もコーチャーもクルーの者も一緒に苦しみそして勵んだ。此の間に於て海内氏は遙ろ、敵地岡山に身を忍ばせて敵の腕前を探ることになつた。幸にして「六高強し」この報来るや、我々の腕は鳴り、血は躍り、壓力のある微笑みが等しく我々の顔に浮び出たのであつた。

「六高強し、六高強し」又しても我には鋭い刺戟が與へられ一層緊張した氣分が漲つて來た。

翌朝十時頃再び自動車で安宅に到り直ちに片山津に向つて出發し五時頃到着した。豫定は昨日中に片山津へ来る筈だつたのだ。漁夫に聞いて見るに朝の申しが波の靜かな時はないと云ふので、其夜即ち十六日午前二時、物凄く静寂の中をわづかにおぼろに霞んだ月明りを頼りに片山津を出發した。遠くで鳴く一番鶏の聲、淋しい、鼻の音、そしてコンスタントなオルの響、すべてが夢の中で漕いでゐる様で云ひ知れぬ趣があつた。

かくて大野へ着いたのは午前九時頃であつた。

片山津の遠漕を終つてから一週に三日は出艇し四日はバック臺で其頃の我々選手は近づいてくる試験の事なんかまるで、眼中に置いてゐなかつた。焼きつく様な日光の直射も、先輩の言葉を想ひ出す時は何等の苦しみも浮ばなかつた。狭い控室の、蒸しかへる様な暑さも校友八百の熱誠を思ふ時、何の痛みも覺える事は出来なかつた。たゞひたすら諸兄の期待に酬ゆべく、漕の様に流れ落ちる汗の中に浸つたのである。試験中は出艇を中止し毎日、三百本づゝのバック臺を引いた。勉強と練習とで、随分苦しかつたには相違ないが、我々は寧ろ、云ひ知れぬ誇りをさへ感じてゐた。却つて、日頃より以上の元氣さへ出て、練習後の爽快さは、試験々々で青くなつたり、終日机にがちり付いてゐる小人共には、到底味ふ事が出来ないものである。のみならず、校長先生や長岡先生及其他の諸先生が殆んど毎日、激勵に來て下さつて、どれだけ我々の練習に張りがあつた事

丁度その頃同じ様に六高の選手監督が單身大野へやつて來て、我々の練習を、薄氣味悪い微笑を以て眺めてゐた。胸に成算あつてか無くてか、合宿所までやつて來て、飯を食つて行つたのはいさゝか驚かされた。

大野合宿中一度も雨に遇つた事なく、豫期以上の好成绩を收め昨年以上の腕と自信を以ていよゝ七月二十四日午前九時四十分、南下の途についた。

校長先生始め、田中、上原、大野、加藤の諸先生及び、神戸先輩、宮地氏、田村、岩田の二君の御見送りを受け、こゝに改めて厚く感謝の意を表する次第である。校友只二人といふ淋しい途出ではあつたが、涙のこもつた激勵の言葉に對し「きつと勝つて参ります」と誓ふ我々の胸の中は、たゞわけもなく、おしよまつて、涙は止めどもなく溢れ出る許りであつた。南下軍の歌もなく、萬歳の聲もなく、物足らぬ寂しさの中に、汽車は既に金澤を後にした。

私は平素の練習の時といひ、この事實と云ひ、八百の生徒より先生達の方が吾々に對し、熱誠であると云ふ事を考へさせられて、何さなく悲しくなつた。ある人が四高スピリットの沈滞を嘆き、又ある人が四高生意氣なしと評したのも、成程と首肯がねばならなくなつた。

こゝに於て私は北辰會各部の聯盟機關の必要を認め四高スピリットの振興は各部の大同團結に在るを叫ばずには居られない。我々に何

で、意氣がなからうぞ。たゞ一小部分の軟弱漢を葬り、似而非四高生の撲滅を断行すればそれでいいのだ。

車中蒸しかへる様な暑さと長途の疲労に悩まされつゝも漸やく五時三十分大津驛着先輩諸兄に迎へられて、一同元氣よく、南下軍の歌を高唱しつゝ、三井寺下の宿所へ行つた。

翌二十五日よりは今迄の氣分とは又異つた緊張を以て毎日二回の練習に一日／＼と凄味を増し自信をつけて行つた。先輩及び補缺は或は和船にて、或は三高のボートを借りて常に激勵と指導を怠らなかつた。二十七日には六高、七高、八高全部揃ひ、練習は日に日に殺氣立つて行つた。コースになれる爲三十日頃からそろ／＼練習コースを引き始めた。お互に、スパイを放つて敵の弱点に乘じやうと焦つた。殊に六高のスパイの仕方は非武士道的で、我々をモーターで追ひかけたことも一再ならず。我々の敵愾心はこれが爲一層高まつたのである。

三十一日 午後七時から公會堂に於て、大學主催の四高校懇親コムパあり。お互に自己紹介をして初對面の挨拶を交し堂々たる勝負をなさん事を誓つた。

八月一日、いよ／＼レースも間近になつた。今日はレースコースを引いて立派なタイムを取り、六高のスパイを驚かしてやらうと、妙に皆緊張した。スタートを切つたのは既に薄暗い頃だつた。初めから、調子が非常によく見事に六分を切る事が出来ると思つたが、

夕陽既に比叡の彼方に沈み薄暮は刻々に迫りて戦雲いよ／＼急を告げた。されど風強く浪亦高くして兩艇の繋留意の如くならず。昨年にもました、悪いコンディションであつた。

時恰も午後六時五十分一發の號報を合圖に兩軍死物狂ひの決勝戦の火蓋は切つて落された。

双方とも見事なスタートの滑出しには審判艇もしばしば追ひ付く事が出来なかつた位であつた。

スタートより三百米までは殆んど兩艇並行したが、こゝに於て我が軍豫定の力漕三十本に果然抜く事一艇身餘り、漸く敵は狼狽の色を現はし急にピッチを上げて、追ひ縋らんとしたが、我が悠々追らざる一本々々の自信あるオールにはその艇差を縮める事すら出来ず、そのまゝ、七百米のオールに到るや敵のオールの亂れたるに乘じ、我らは再び猛烈なるスパートに出で、差は益々大さなつた。焦りに焦つた敵は最早や勝算到底覺束なしと見て取るや、矢庭に艇首を變じて、我がコースに無謀にも侵入し來り、ピッチを上げて、盲目滅法我が艇尾に打つつけんと企んだ。かくの如きスポーツマン、スピリトを無視した非道德的な戦法に觀る者たゞ呆然として言ふべき言葉もなかつた。しかし時既に遅く、我が整調の巧みなコントローに一本のオールも亂るゝこさなく見事なラストスパートの頑張り遙か敵艇を、二艇身餘の彼方に引き離し、堂々ゴールに入つたのである。

ラスト二百米の所で四番が倒れてしまつた。残りの五人でゴールまで漕ぎ終つた時、何故か皆大聲を上げて泣いた。今でもなぜ泣いたのか誰も知らない。その翌日三十本の力漕で、五番がオールを折つてしまつた。

倒れるまで頑張つた云ふその意氣さ、オールを折るまでも、全精神を一つのストロークに注いだ云ふ元氣さは戦はずして、既に六高を精神的に壓倒したものである。

いよ／＼八月四日は來た。

過去一年間の努力が報いられたか、葬り去られるか。今日だ、しかも今日のたつた五六分間で決せられるのだ。

あゝ想へば今日あるが爲に我々はどれだけ苦しんだらう。ボートにバック臺に我々は幾度血の様な涙を流した事だらう。血も涙も苟も勝利の榮冠を受くるに必要な代價は、こゝろ／＼拂ひ盡したのである。今日さなつては、最早や天命に従ふより他に仕方がないのである。代價の多い方に報いられるのである。

午後三時半、先輩、應援團に圍まれ最後の激勵の言葉を受け、戦場に向つた。石場には赤の大旗が數本立てられ、赤の小旗で埋められた無數の應援船はコースの兩側に陣取つて鐘や太鼓の響に琵琶湖の水も湧くかと思はれた。

時刻は次第に移りいよ／＼七高八高のレースの後を受けて、六時乗船・スタートに向つた。

「四高勝つ、艇差二艇身五分ノ二 四高勝つ……」

審判員の朗らかな聲が湖上に響き渡るや、群がる應援船や觀覧船からは、歡聲一時に渦を卷いて爆發し、赤旗は空に亂舞し、白旗は地に伏して、實に、天地もとよまん許りであつた。

「有難う。よく勝つて呉れた!!」

「有難う!!」

選手も、校友も、先輩も、たゞ相抱き合つて泣く許りであつた。

嗚呼!! 何といふ、美はしい若人の感激よ!! 何といふ喜ばしい、勝利の瞬間であつたらう!!

「水悠々さ流れてゆく、

花の野煙る夕間暮れ……」

選手一同應援團に取り圍まれて、あの靜かな部歌の高唱を聞かされた時、始めて眞の吾れに歸り落ち付いた氣特になつて、苦しかつた過去一年間を追想し、今報いられた喜びに、涙は止めどもなく流れ、我等は聲を限りに、男泣きに泣いたのであつた。

「勝つたのだ。泣かなくていい、」と吾等を抱く先輩も矢張り泣くより他に仕方がなかつたのである。

勝つたんだ。俺達は見事に六高を破つたんだ。

威張つて金澤に歸る事が出来るんだ。

熱い心を以て我々を送つて下さつた、諸先生にもこれで、立派に合はす顔が出来たんだ。

激勵大會の日、校友諸君に誓つたあの固い約束を今始めて果す事が出来たんだ。

すべては報いられた。

吾々の勞苦は、かくも輝やかしい勝利の榮冠となつて吾々の前に捧げられたのである。

勝てり 勝てり

我が部の選手は勝てり

比叡の麓 たそがれて

夕日紫金のきらめきに

再び刻みし金の文字

それ聞け我部の関の聲

力ある我が四高健兒の叫び聲は晩靄こめし湖の彼方に強く強く、どこまでも響いて行つた。 一九二四、二二、一（三輪稿）

（附）ピッチ表

（四高）第二コース	40	32	32	34	32	30	32	34	33	20	30	32	34	36
（赤）	40	32	32	34	32	30	32	34	33	20	30	32	34	36
（白）	42	34	30	30	32	32	33	32	30	30	29	30	33	33
（六高）第一コース	42	34	30	30	32	32	33	32	30	30	29	30	33	33
スタート	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	ラスト
（タイム）六分二秒（新聞は誤り）（艇差）二艇身五分ノ二														
（七高タイム六分四六秒）														

競技部報

思ひ起す昨年の雪辱!!! 四高勢再び危しとの風説を外に尾山城を死守して驅れる遠征軍を一步も踏み入らせず、仙石原頭鶴翼の陣を布いては草茫々水滔々たる邊りに松本勢の最後の一人までを露さ化さしめた我々の誇り。而して勝利の凱歌に金城を仰いで誓つたのは、「來年も又」の一言であつたのである。

かくして光榮の年は靜かに逝き、やがて生れんとする新なる光榮を秘めし年は東の空に白み來た。その赫々たる朝陽を浴びて我々は朔風に馬鞭を東に指して再び誓つたのである。

「必ずや信州を席卷せん。」と。

短い三學期は夢の様に、そして風未だ寒き北陸の三月に暗き寮に合宿した我々は幾多の先輩を送り出し残り少なのチームメイトを心細く眺めた。布施、安倍、神戸、齋藤等錚々たる闘將の姿は消え、加へて昨年の最高得点者一代の風雲兒と稱さる藤澤病んで今年の出場覺束なく、新に主將に擬せられた松長又病の爲に辭し半夜殘燈に將士等の影も幽かつたのである。我々は歎息した。焦り乍ら短かい合宿は雪霰に閉ざされ勝ちに過ぎた。

陽春四月トラックのアカシアは若緑りに萌へて來た。健兒の血潮は一冬押へられて來た丈けに凄く沸き立つた。かの歎息をして杞憂に終らしめん、新に主將の印璽を受けた原田はスケデュールを擧げた。其の下に集るは昨年來の松原、服部、幅野、高橋等に加へて新進の相澤、竹中、織田、平井等の諸將、已に意氣に於て松本何する者ぞの感が有つたのである。

■第二回對石川四郡教員聯合、五月十八日、於師範トラック、四高四十六点、聯合三十二点。

櫻吹雪を衝いてのロング、若緑のローンを滑るスプリントの練習も一段落さ成り第二期の練習に入るに先きだち北陸に於ける最強クラブチームたる教員聯合にチャレンジした。

昨秋我々は新チームで戦つて大に苦戦し此度も彼等は必勝を期じてゐたが相當の差で勝つた。

好レコードとしては相澤の短距離、松原の中距離で就中八百米リレー（松長、松原、林、相澤）は從來の四高記録を破つた。又此の試合中、原田主將が踵を挫き七月まで練習不可能に成り棒高跳及ハイドルに大打撃を受けた。

■第一回北陸學生聯盟競技會 六月十五日 於金石トラック。採点は一等五点、二等三点、三等二点、四等一点として。

四高百十三点、富業四十五点、金工二十六点。

葉櫻の一雨毎に濃く初夏の面影は尾山城を濠に寫してチームの軍

容は完成に近づいて來た。第二期即ちフォーラムの練習は済み今はレコードを延ばすのみである。我々は信州を席卷する前に越の覇權を完全にせんま金石にベストメムバーを動かし段達に優勝した。新記録としては松原の四百米、高橋の千五百米ま八百米リレー（松長、松原、林、相澤）の三つのみだが他に相澤の百二百米や松長のホップ、幅野のハイハイドルも相當な所である。又個人得点も松原、松長、林の順で四高が得た。

■對神通中學 六月二十九日、練習トラック、

始めは有りふれた練習試合の積りだつたが意外にも四高選手物凄く活躍し四百米、千五百米ホップの三つの新記録を産んだ事は特筆すべきである。

■對松高選手豫選會 七月十六日

苦しい試験も過ぎ我々はグループに分れて合宿した。此の四五日間の練習の凄かつた事、多少オーバーワークの傾向さへも有つた位だ。此のミート最後に我々はエナジーを貯蓄する爲、試合の日まで絶対に練習を禁ぜられた。尙ニユウレコードは松原の八百米のみだつたが幅野の走高跳や踵を痛めて一度跳んだ切りだつたが松長のホップも好かつた。

■對松高戦 七月二十二日

遂に最後の日は來た。信さ越さの地上の覇權を争ふ日は來た。十七日の眞夜中、勝たずんば再び校友に見えずの決心を抱いて金澤

を出でた我々の胸中は充分なる勝算が已に有つたのである。一寸試合経過を。

▲午前九時澤田レフェリー立會の下に壯嚴なる入場式舉行、直ちに競技に入る。

▲百米 四高―相澤、松長、林 一五點

松高―飯澤、芳賀、鈴木 一三點

從來記録十一秒九―飯澤重一

從來は松高得意の種目、而し乍ら今年の四高軍は此種目は實に多くの選手を有してゐる。松高軍は十二秒を切るランナーは僅に芳賀一人と云ふ情報に反し我々は同様のランナーを六人有してゐる。全勝は決して難からざる所、意氣天を衝いてスタートに並んだ。號砲一發例によつて四高流スタート鮮かに、就中試合強き松長は見事に五〇米までリードすれば天才兒相澤平常の如くスパートし林劣らじと續き七〇米にては相澤、松長、林と我軍三者見事先頭を切つたが惜くも、八〇米邊にて林倒れ芳賀三着に入る。レコードホルダー松高飯澤主將は元氣なく四等に落ちた。

一等 相澤 十一秒六―新記録 二等 松長 一米半遅る

三等 芳賀 五〇厘遅る

▲砲丸投射 四高―服部、作井、織田―三點 計八

松高―飯澤、渡邊、河合―三點 計四

從來記録 服部正夫十二米五一

飯澤、服部の顔合せは之で三回目、而も常に一等争ひを爲す故、人氣を呼んだが惜むらくは服部コンデション悪く接戦の結果二等に落ちた。尙ベスト4には四高三者と飯澤とが入選。

一等 飯澤 十二米二三 二等 服部 十一米九〇

三等 織田 十一米〇九

▲八百米 四高 松原、高橋、北川―四點 計十二點

松高 須山、山口、大渡―二點 計六點

從來―千葉(松高)二分十四秒

松原は天下無敵の感あり。その優勝は明らかである。又スプリント付いた高橋のレコードも練習時には千葉の夫を破る感があつたが午後の千五百米の爲に自重して豫定の如く樂々一、三等を取つた。

一等 松原 二分十四秒六 二等 須山 十米遅る

三等 高橋 三米遅る

▲走高跳 四高 幅野、藤澤、富澤―一三點 計十三

松高 鈴木、渡邊、御子柴―五點 計十一

從來記録一米五九―鈴木鳴海

我に不利な種目、而かも幅野よく粘つて貴重な一點を物した努力は多きべきである。

一等 渡邊 一米六二 A―新レコード

二等 鈴木 一米六二 新レコード

三等 幅野 一米五八―四高新レコード

▲圓盤抛 四高―松長、織田、服部―一三點 計十四點

松高―飯澤、渡邊、上島―五點 計十六點

從來レコード 飯澤重一、二六米六五

飯澤、織田の接戦を豫期されたが織田腕を痛めて振はずベスト4に入るに止り、松長善く粘つて三等を得た。

一等 飯澤 二九米三九―新レコード

二等 渡邊 二七米六三―新レコード 三等 松長 二六米四八

▲高障碍 四高―幅野、高野、近藤―四點 計十八點

松高―鈴木、渡邊―二點 計十八點

從來記録 十七秒二布施元―四高

幅野物凄き元氣にて始めからリードすれば渡邊之に吊られてハドル三個をノックダウンしてガミットされ高野、鈴木は二等争ひは身長の爲に鈴木に奪はれた。

一等 幅野 十八秒二 二等 鈴木 三米遅る

三等 高野 三〇厘遅る

▲千六百リレー 四高―林、北川、相澤、松原―三點 計二二點

松高―須山、城所、山口、上島―〇點 計十八點

從來記録―三分五十五秒―四高

リレーは問題ではない、殊にラストの松原はどれ程負けて來ても一人で取り返す自信がある。一般に四高軍は午後の爲に樂走を續けたが、それでも最後の松原のゴールインの頃には矢張り三〇米も勝

つてた。

タイム 三分五十三秒四、―新レコード

我々の策戦では午前は四高に不得手の種目が多いから五、六點負け越して來て午後で盛り返す積りだつたが意外にも午前中已に勝越して居る。勝利はジツヘルと見えて來て我々の元氣は百倍して來た。午後は一時半再會。

▲二百米 四高―相澤、林、松長―四點 計二十五

松高―芳賀、鈴木、上島―二點 計二〇

從來記録―二四秒二―藤澤三郎 四高

百米の調子では全勝の豫定だつたが松長走幅跳に備へて後半を落とし相澤、林悠々一、三等を取つた。

一等 相澤 二十四秒三 二等 芳賀 三米遅る

三等 林 一米遅る

▲千五百米 四高―高橋、油野、松原―五點 計三〇

松高―須山、山口、小田切―一三點 計二二

從來記録 千葉 四分四六秒

松原の策戦圖に當り見事四高全勝に見へたが須山焦つて我が油野にインターフェアして三等に入り一時問題と成つたが我々はスポーツマンシップの立場とて見逃して一點を譲るの雅量を示したのは反つて愉快だつた。

一等 高橋 四分五〇秒 二等 松原五米遅る

三等 須山 三〇米遅る。

▲走幅跳 四高—松長、富澤、幅野—三点 計三三点

松高—芳賀、飯澤、鈴木—三点 計二四点

從來記録 六米一八五 布施元—四高

ベスト4に入る時には五米九二、五米九〇、五米八八まで大接戦で

芳賀、松長、飯澤の順、四高の危機至るの感があつたが流石松長、最後の一躍に決死の勢を示して見事危機を脱した。

一等 松長 五米九八 二等 芳賀 五米九二

三等 飯澤 五米八八

▲槍投 四高—服部、作井、保井—五点 計三八

松高—渡邊、岩島、伊藤—一点 計二五

從來記録 四—一米七四 服部正夫

勝負は始めから四高優勢で問題に成らなかつたが、ひどい逆風で新レコードの出来ないのが残念だつた。

一等 服部 三九米四七 二等 作井 三八米九七

三等 渡邊 三七米一三

▲低障碍 四高—竹中、高野、近藤—二点 計四〇点

松高—飯澤、芳賀、鈴木—四點 計二九點

從來記録 二十八秒八 飯澤重一

走高跳と同じく四高の最もウキークポイントで全敗を覚悟してた所意外にも新進竹中物凄きラストスパートに見事二等に喰ひ込んだ

のは天晴だつた。

一等 飯澤 二八秒八 二等 竹中 一米遅る

三等 芳賀 二米遅る

▲四百米 四高—松原、相澤、林—四點 計四十四點

松高—須山、城所、上島—二點 計三一點

從來記録 千葉 五七秒四

松原の最も得意な種目、之に配するに相澤、林のニスプリンダーで全勝の策戦を建てたが不幸一寸したはづみから全勝が出来なかつたのが惜しい。

一等 松原 五五秒六 新レコード 二等 須山 五米遅る

三等 相澤 胸幅遅る

▲ホップ 四高—松長、幅野、近藤—四點 計四八點

松高—飯澤、芳賀、鈴木—二點 計三三點

從來記録 十二米四五、五 布施元

四百米が済んだ時に四高の得点は已に四四點で過半数の四十六點までには僅に二點である。而もホップは四高には日本屈指の松長が控へてる。松高の意氣の落ち方を見るも氣の毒だつたが味方總崩れの中に最後まで頑張つた飯澤主將の心事を思ふ時、我々は一掬の涙を惜まなかつたのである。

一等 松長 十二米五九 全國高校新記録

二等 飯澤 十二米〇九 三等 幅野 十一米五九、五

▲棒高跳 四高—原田、平井、清水重—三點半 計五一點半

松高—太田、渡邊—二點半 計三五點半

從來レコード 二米九五 西村、原田

太田も案外粘つて來た。原田も頑張つたが遂に夕暗がバーを隠してレコードが取れぬのが残念だつた。

一等 原田 三米〇一 新記録

同 太田 三米〇一 新記録 三等 平井 二米九〇

▲八百米リレー 四高—松長、松原、林、相澤—三點 計五四點半

松高—芳賀、田中、鈴木、飯澤—〇點 計三五點半

從來記録 一分四二秒四—四高チーム

リレーは不思議に四高は強い。松高は此の一種目を頑張つて新手を出して戦つたが我が松長、松原等は一日半の奮闘にも一寸も疲れず、軽く押へてしまつた。

タイム、一分三九秒四—新記録

時正に七時半、高原の夕暗は冷氣を心地好く送つてアルプの山影靜かに我々の勝利を祝する如く、突如として起る「勝てり」の大喝唱、選手一同は相擁して唯感激に泣くのみであつた。

當日應援して下された諸兄に厚く御禮を此處で申し上げます。

× × ×

■一年對二年試合 九月二十三日 練習トラック

秋のシーズンの手初めに新進と中堅との試合、豫想では大接戦の

筈だつたが一年の御大相澤病氣中で元氣なく五一点對二七點で二年

軍の大勝を成つた。新レコードは織田の圓盤のみだが、二年の御大松長が千五百と棒高跳を除く、全部に出場して走高跳以外は皆点にして得た二〇點半が大きかつた。番狂せは富澤が松長を抜いて走幅跳に一等や松長が八百米で油野を破つた事等であらう。

■第二回北陸學生聯盟競技會 十月十二日 於富山神通トラック

四高 百二十六點 富澤 三三點 福工 一三點 金工 一三點

宛然四高の競技會で全く張合が無く強者の悲哀を味はう始末。新レコードとしてはベストメンバーで行つた八百米リレーの一分三十五秒八が輝いてる。新進竹中が二百米をリードして最後には松長に敗れたが殆んど同着であつた事、ホップが済んでから直ちに四百米を走つた松長がラストに松原に迫つた事等が人氣を呼んだ。尙個人得点は松長の二五點半が斷然眼立ち幅野の十四點が之に次いでる。

■神宮北陸豫選會 十月十七日

餘り氣乗のしないミートینگで四高の出場者が少なかつた故、大したレコードは無かつた。四高新記録として松長のホップ、十三米十六、のみだが先輩神戸を加へた北辰チームの千六百米リレー(松長、林、神戸、松原)のレコードも好かつた。

× × ×

■第三十一回 北辰會運動會 十月二十六日

文科對理科對抗競技會記事

對抗競技會を始めてから之で五回目、第二回第三回が理科、第一回第四回が文科で今年が決勝に當り始めの豫想は大接戦で有つたが文科選手には服部、相澤等病人が續出、松原の孤軍奮闘も甲斐なく理科が勝つた。一寸試合経過を。

▲百米 理科五点 文科一点

- (1) 十一秒六 林 (2) 松長 (3) 竹中

此の日の林のスプリントは物凄かつた。スタートは相澤リードしたものの、病氣で身体に無理がある。五〇米邊では已に林が他の者から三米も離れてたがゴールで松長のスパート好く一米半までに詰めた。

▲二百米 理科五点 文一点

- (1) 二四秒六 松長 (2) 林 (3) 松原

林のスタート好くコーナーまでに松原に追い付いたがコーナーを出る時には意外にも松長、松原、林、三騎並行して物凄く接戦の結果松長胸幅丈け勝ち松原は林に一米遅れた。

▲四百米 理科三点 文三点

戦前誰も松原の優勝を信じて接戦などは思ひもよらなかつたがスタートするより松長びたり松原の後に付いたまゝ、離れず最後の直線路から二者ならんだまゝ、死物狂ひの大接戦に満場總立ち。ゴールまで綺麗に並んできた二人はフィニッシュで松長一寸勝ち常勝軍松原遂に始めて敗れた。こんな大接戦は恐らく二度と見られまい。竹

中は二〇米遅れた。

- (1) 五六秒六 松長 (2) 松原 (3) 竹中

▲八百米 兩軍〇

新進川上、返咲きの藤澤が松原高橋との接戦を豫想されたがジャツヂにミステークが有つて勝負預りこ成る。

▲千五百米 理科五点 文一点

高橋の獨占とは云へマラソンの疲れがあつてどうかと思はれたが藤澤好走して高橋を守り、矢張り理科の勝ち成つた。

- (1) 高橋 五分六秒六 (2) 藤澤 (3) 油野

▲十哩 文二〇点 理科五点

往路は油野高橋並んでリードしたが歸路で油野頑張り一等と成る。インターカレッジの覇山本は三等に落ち往年の金城の雄、三清が練習不足で賞外は氣の毒だつた。

- (1) 六六分二五秒 油野 (2) 高橋 (3) 山本 (4) 岡本 (5) 小林

▲八百リレー 文三点 理科〇点

二百米の強さから云へば當然理科が勝つ可きだが胸幅の差で文科が勝つた。理科の敗因は松長がバトンを受ける時受け損れて竹中にコーナーを取られたに有る。

- (1) 一分四二秒八 文 (相澤、齋藤、竹中、松原)

- (2) 一分四二秒九 理 (高野、織田、松長、林)

▲千六百リレー 文〇点 理科三点

此のゲームが始まる頃には全く夕暗に包まれ、唯白衣の壯士と應援の叫びのみが戦場を彌が上に凄惨たらしめた。理科の新手に引き換へ文科の選手全く疲れてラストの松長がゴールに入る頃には流石の松原も二〇米程遅れて居た。

- (1) 三分五九秒八 理 (織田、北川、藤澤、松長)

- (2) 二〇米遅る 文 (相澤、齋藤、竹中、松原)

▲ハイハールドル 文〇点 理科六点

幅野凄く優勢に見えたがラストの二臺倒して、よろめく間に高野胸幅程抜いて一等は番狂せ。

- (1) 高野 十九秒四 (2) 幅野 (3) 近藤

▲ローハールドル 文五点 理科一点

豫想の如く竹中スタート依り優勢。唯番狂せは一回も練習した事の無い作井がラストスパート物凄く竹中に迫つた事である。

- (1) 二九秒六 竹中 (2) 作井 (3) 林

▲走幅跳 文三点 理科三点

期待された松長フワッル四回も重れて僅に五米八〇代に過ぎず、松原も六米をオーバーし乍ら後に倒れて五米代に止んだ。

- (1) 五米九八 松原 (2) 幅野 (3) 松長

▲ホップ 理科五点 文一点

松長唯一回の跳躍で一等を取れば幅野又元氣を出し十二米二二で二等、三等の松原さへも十二米は樂々越してゐた。

- (1) 十二米六三 松長 (2) 幅野 (3) 松原

▲走高跳 理科四点 文二点

松原又もや孤軍奮闘二等に喰ひ込んだのは偉さすべきである。

- (1) 一米五七 幅野 (2) 松原 (3) 織田、藤澤、近藤

▲棒高跳 理科四点 文二点

平井の元氣遂に原田を越し餘裕を示して一等。三等の小川は身体があるから將來有望だ。

- (1) 二米九〇A 平井 (2) 原田 (3) 清水、小川

▲砲丸投射 理科五点 文一点

服部、作井出場せず織田の一人天下。二、三等は老巧州崎原田が競つて松長を落した。

- (1) 十一米九 織田 (2) 州崎 (3) 原田

▲圓盤 理科六点 文〇点

諸將倒れし文科は吉田マネッシャー一人淋し氣に出場し、遂に理科全勝。

- (1) 二八米七二 織田 (2) 州崎 (3) 松長

▲槍抛 文六点 理科〇点

服部病むも文科は多士濟々、圓盤の仇を見事に報復して全勝

- (1) 四七米 作井 (2) 光成 (3) 保井

かくして理科六〇点文化三九点で理科の大勝に歸した。

▲中學校千六百リレー

(1) 金澤二中 三分五十七秒六 (北島、池田、宮本、小原)

▲専門學校八百米リレー

(1) 金澤醫大 (高橋、砂、齋藤、神戸)

X

X

X

■大正十三年度四高競技部公認記録及保持者

百米 十一秒六 吉野信一郎 相澤巖夫 (四回) 林輝焜

二百米 二四秒二 藤澤三郎

四百米 五五秒 松原信行

八百米 二分十四秒二 松原信行

千五百米 四分四四秒八 高橋讓

十哩 六三分四五秒 齋藤忠義

高障碍 十七秒 布施元

低障碍 二八秒八 布施元

八百米リレー 一分三五秒八 松長繁次、松原信行、林輝焜、

相澤巖夫

千六百リレー 三分五二秒四 相澤巖夫、林輝焜、北川豊、松原

信行

走幅跳 六米二〇 布施元

走高跳 一米五八 幅野禎太郎 (二回)

棒高跳 三米二七 西村正己

ホツプ 十三米十六 松長繁次

砲丸投射 十二米五一 服部正夫

槍投 四二米六五 服部正夫

圓盤抛 二八米九八 織田寛

右の中、布施の高障碍と松長のホツプは全國學生聯盟のレコードを破つてゐる。

編輯の後に

一寸さした手違ひのために二學期の試験後に配付すべき雑誌を三學期の初めにやつと諸君に御目にかけねばならなくなつたことを重く御詫び致します。

今學期は良いものも集らなかつたし、各部諸君は部報をどつさり載せて呉れると耳にたこが出来る程御苦情を持ちこまれたので思ひ切つて今度の雑誌は部報のみとしました。

八月のガラ／＼光る太陽を浴びて、四高のために、僕等のために、戦つて下さつた各部選手の努力は尊いものと云はねばなりません。い。戦に勝つた、負けたは問ふ必要は無い。然し所謂四高スピリットと云ふものが年一年薄らいで行く様に思はれるのが悲しい。時世の潮流が「超然」をモットーとする四高に滲み渡つて皆んなが賢くなつたと云へば云へるが、せめて高等學校の三年だけでも意氣と感激の生活を送りたいものだ。賢い人々はそれは馬鹿げて見えるかも知れない。かうして年々なり賢い人々が入つて来て、知らず／＼の間に四高の御建替へが完成して行くのだらう。但し賢い人々よ！誤解して呉れるな。破衣、破帽、醬油にしめの様な姿をして喧嘩して歩けと言ふのではない。

男らしい意氣地があればそれでよいのだ。これから四高の中堅と

なつて行く方にしかつり頼むぞ。

前にも記した通り今學期は部報のみにした代りに、來學期は大いに内容の豊富な雑誌を作りたいと思つてゐます。皆さん大いに勉強してどし／＼御投稿して下さい。妄言多謝。(先崎)

